



# 唐代都城の空間構造とその展開

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

城倉正祥 著

2021年9月



# 唐代都城の空間構造とその展開

城倉正祥 著

2021年9月

早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所

## 例言

1. 本書は、早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所の調査研究報告第5冊として刊行した。
2. 本書は第I部、第II部として2本の未発表書き下ろし論文を掲載し、科研報告書として刊行した。
3. 本書の編集は、Adobe Indesign を用いて城倉（研究代表者）が行った。表紙デザインは、高橋亘（早稲田大学大学院文学研究科修士課程）が担当した。
4. 本書は、以下の科学研究費補助金の成果である。
  - ①基盤研究（C）『衛星画像のGIS分析による隋唐都城とシルクロード都市の空間構造の比較考古学的研究』（課題番号：17K03218、代表：城倉正祥）
  - ②国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）『GISを用いた東アジア都城・シルクロード都市遺跡の比較考古学的研究』（課題番号：16KK0040、代表：城倉正祥）
5. 本書の刊行費（300部）は、上記科研②より支出した。
6. 本書の内容は、早稲田大学リポジトリ、および全国遺跡報告総覧でPDF完全版を公開している。なお、本報告書で掲載した図版（実測図・写真）は、既に発表されている報告書・概報・論考などから転載したもので、カラートーンを入れて表示した。出典は、各論文末の図表出典一覧にすべてを明記した。

## 謝辞

本書は、2019年3月28日～2020年3月15日の1年間、科学研究費補助金（国際共同研究加速基金）を用いて、中国社会科学院考古研究所に「客座研究員」として滞在した際の研究成果に基づいている。滞在期間中に、南北朝～唐・遼の宮城中極部から出土した瓦を多く実見した経験が、第I部論文をまとめる動機となった。また、2015～2018年にキルギス共和国アク・ベシム遺跡で実施した測量・発掘・資料調査の経験は、唐代都城の展開過程を東西で比較する視点を発想する契機となった。さらに、奈良文化財研究所在職時の2007～2010年に経験した北魏洛陽城2・3号門の発掘で生まれた問題意識は、第II部論文としてまとめることが出来た。この間、本当に多くの方々にご指導・ご教示をいただいたが、ここでは、2019年度の中國滞在中、およびキルギス調査でお世話になった方々を中心にご芳名を記し、感謝の気持ちを表したい。

（国内）石田由紀子・植月 学・小田裕樹・加藤一郎・川村悠太・近藤二郎・菊地大樹・久米正吾・吳心怡・齊藤茂雄・高橋龍三郎・高橋 亘・田畑幸嗣・谷川 遼・千葉 史・寺崎秀一郎・伝田郁夫・長崎潤一・ナワビ矢麻・望月秀和・桃崎祐輔・山崎世理愛・山藤正敏・横山 真・劉德凱・若杉智宏・渡辺 珙。

（国外）バキット アマンバエヴァ、バレリー コルチェンコ・陈星灿・丛徳新・董新林・龚国强・郭曉濤・韩建华・何利群・贺云翱・李春林・刘涛・刘振东・莫阳・钱国祥・沈丽华・史家珍・石自社・汪勃・王小迎・王一杰・汪盈・王子奇・吴业恒・姚庆・岳天懿・俞莉娜・朱岩石。

特に、下記の先生方には、刊行前に本書をお読みいただき、ご意見をいただいた。お忙しい中、それぞれの専門的立場から貴重なご指導をいただいた点、心より感謝申し上げたい。

小澤 裕（三重大学）・川尻秋生（早稲田大学）・櫛原功一（帝京大学）・佐川英治（東京大学）・佐川正敏（東北学院大学）・妹尾達彦（中央大学）・山内和也（帝京大学）・渡辺晃宏（奈良大学）。

※日本語は五十音順、中国語はピinyinのアルファベット順、敬称略。

## 目次

### 『唐代都城の空間構造とその展開』

例言・謝辞・目次・序言

#### 第Ⅰ部 唐碎葉城の歴史的位置—都城の空間構造と瓦の製作技法に注目して—

はじめに	1
1. 唐碎葉城の調査研究史と課題	1
2. 唐碎葉城の空間構造とその特色—西域都市・中原都城との比較から—	22
3. 唐碎葉城出土瓦の製作技法とその系譜	33
4. 唐碎葉城の歴史的位置	55
おわりに	56

#### 第Ⅱ部 東アジア古代都城門の構造・機能とその展開

はじめに	61
1. 古代都城門の研究史と課題	61
2. 古代都城門の分析視角	80
3. 中原都城（漢・唐・宋）と草原都城（遼・金・元）の門遺構	90
4. 高句麗・渤海都城の門遺構	131
5. 日本都城の門遺構	146
6. 東アジア古代都城門の構造・機能とその展開	162
おわりに	188

結言・著者略歴・出版シリーズ・報告書抄録

## 序言

2012～2020年度にかけて、以下の学内研究費（早稲田大学）・科学研究費補助金を獲得した。

- 1.『平城京設計プランの溯源に関する考古学的研究—中国隋唐長安城・洛陽城との比較から—』  
(早稲田大学特定課題／2012A-502)
- 2.『北方遊牧民族（遼・金・元）都城の構造的特質と中原都城との比較に関する考古学的研究』  
(早稲田大学特定課題 2015A-501)
- 3.『隋唐都城における都市空間（里坊）の構造と東アジアへの展開過程に関する考古学的研究』  
(科研費・若手研究B／26770271)
- 4.『GISを用いた東アジア都城・シルクロード都市遺跡の比較考古学的研究』  
(科研費・国際共同研究加速基金／16KK0040)
- 5.『衛星画像のGIS分析による隋唐都城とシルクロード都市の空間構造の比較考古学的研究』  
(科研費・基盤研究C／17K03218)

特に、4・5の科研費では、唐長安城・洛陽城の空間構造を、東アジア都城・西城都市というユーラシア東西の大きな枠組みで比較することを目的とした。4の研究課題では、一定期間以上の海外での研究活動が定められていたため、2019年3月28日～2020年3月15日の1年間、中国社会科学院考古研究所に客座研究員（受入研究者：朱岩石副所長）として滞在し、中国都城の研究を進めた。研究期間中は、中国社会科学院考古研究所の各調査隊の発掘現場を視察すると同時に、各都城の宮城中枢部出土瓦の資料調査を実施した。これにより、中国都城、及び出土瓦に関する知見を深めることができた。また、1年間、中国社会科学院考古研究所に滞在したこと、多くの研究者と交流する機会に恵まれ、講演会やシンポジウムへの参加など多くの学問的な刺激も受けた。個人的には、北京での都会生活も非常に得難い経験だった。

しかし、2020年1月頃から始まった世界的なコロナの感染拡大によって、中国国内およびキルギス共和国で予定していた瓦の資料調査を断念せざるを得ない状況となり、当初の研究計画を大きく変更する必要に迫られた。そのため、4の科研費を2年間、5の科研費を1年間延長申請し、海外調査が実施できない代替手段として、国内での分析作業と研究の総括に集中することに決めた。海外での調査費用として準備していた4の科研費は、本書の刊行費（300部）として支出することにした。内容は、唐碎葉城を中心とした西域都市の比較分析、及び門遺構から見た東アジア都城の空間構造の比較分析、の2本立てとし、約1年半かけて執筆を進めた。幸いなことに、本科研の研究方法が、①衛星画像を用いた分析、②発掘遺構の分析、であったため、コロナ禍でも分析・執筆作業を計画的に進めることができた。特に、主要な分析対象となる中国の発掘概報は、中国政府が公開しているCNKI（China National Knowledge Infrastructure／中国知網）を利用することで、日本国内でPDFをダウンロードできるようになっており、基礎資料の集成作業にも支障はなかった。日本国内においても、全国遺跡報告総覧などのデータベースが急速に整備されつつあり、考古学の遺構分析が新たな研究段階に入っている点を実感した。

一方、急速に進むデジタル化によって、「膨大な情報量との対峙」という新しい問題にも直面している。毎年、中国全土の「デジタル空間」で発表・公開される論考（主要雑誌の他、地方雑誌・大学紀要・学位論文などを含む）、報告書・簡報、図録は膨大な数に及び、その情報を把握・整理するだけでも多くの時間がかかるようになった。基礎資料へのアクセスが容易となり、研究の利便性が向上する一方で、「情報の海」で溺れることなく、研究の方向性をしっかりと見定めることが益々重要になっている。本書で示す衛星画像・発掘遺構の分析に基づく都城の国際的比較研究は、デジタル時代の都城研究においても、斬新な視点を提示しうる方法論だと考える。特に、グローバル化が進む現代社会において、逆説的に各國単位の「内向的研究」が蓄積されている状況だからこそ、粗削りではあっても、全体を俯瞰する考古学的な研究が重要だと考える。本書は、以上の視点に基づき、唐代都城の展開過程を東西で大きく比較する挑戦的な試みである。

## 第Ⅰ部

## 唐碎葉城の歴史的位置

—都城の空間構造と瓦の製作技法に注目して—

## はじめに

シルクロードの世界遺産に登録されるキルギス共和国アク・ベシム遺跡は、城壁で囲まれた2つの都市が「連接する」特異な都市遺跡である。中国では内モンゴル自治区の遼上京城、黒龍江省の金上京城など、「皇城」と「漢城」が連接する都城の存在が知られているが、「中国」縁辺部において異なる民族的伝統を持った集団が「接触」する際に、このような現象が発生する点は非常に示唆的である。その発生のメカニズムを各遺跡で歴史的に位置づけることで、中国都城の思想的背景や設計原理を考究できる可能性がある。

アク・ベシム遺跡は、「ラバト」で発見された「杜懷寶碑」により、漢語文献の「碎葉」、イスラム文献の「Suyab」に比定されており、唐代安西四鎮の1つ、「碎葉（鎮）城」だった点が判明している。近年の発掘調査の成果からも、ソグド人が造営し、カラハン朝の都市として栄えた「シャフリスタン」の東に隣接し、現在は一部の城壁を除いて消滅した「ラバト」が唐碎葉城であった点が確定しつつある。すなわち、唐碎葉城は西域経営の「橋頭堡」としての軍事的・行政的性格を有すると同時に、政治的・経済的戦略をもってソグド人商業都市と連接された特異な歴史的背景を持つ「唐代都城」と考えることが可能である。唐代都城の思想や原理を追求する上で、重要な分析対象といえる。

本論では、唐碎葉城の歴史的位置を明らかにするため、①都城としての空間構造、②出土瓦の製作技法、の2点に注目し、唐中枢部の長安城・洛陽城と比較する。碎葉城の唐代西域都市としての歴史的性格を考古学的に追及し、唐代都城の思想背景や設計原理を考究することが本論の目的である。

## 1. 唐碎葉城の調査研究史と課題

## 1-1 アク・ベシム遺跡の位置・歴史と平面配置

アク・ベシム遺跡は、キルギス共和国の北部、チュー川上流域に位置する。首都のビシュケクより東に60km、キルギス第3の都市トクマクの西南8kmのアク・ベシム村近郊に所在する。チュー盆地は、長安から河西回廊を抜け、天山北麓に至るシルクロード「天山北路」の要衝であり、周辺にはクラスナヤ・レーチカ、プラナといった世界遺産の都市遺跡も立地する（図1）。

アク・ベシム遺跡の歴史は、5～6世紀にソグド人が建設した都市から始まったとされる。7世紀には西突厥の支配下に入り、7世紀後半から8世紀初頭にかけて唐・吐蕃の係争地となった。8世紀にはトゥルギュ、カルルクが勢力を伸ばし、11世紀中葉にカラハン朝がバラサグン（プラナ）に中枢を遷すまでシルクロードの重要都市として栄えた。以上の6世紀に及ぶ歴史の中でも、7世紀後半～8世紀初頭、すなわち唐碎葉鎮の置かれた時期が本論の分析対象とする時代である。漢語文献に登場する「唐」碎葉鎮は、1982年に発見された「杜懷寶碑」によってアク・ベシム遺跡に比定されるようになった（加藤1997・内藤1997・齊藤2016・周伟洲2000aなど）。碑文には、安西副都護の役職にあった杜懷宝が、亡き母のために一仏・二菩薩（三尊像）を彫らせたことが記載されている（図2）。この碑文の発見により、唐代安西四鎮（龜茲・疏勒・于闐・碎葉）（周伟洲1994）の1つである碎葉鎮がアク・ベシム遺跡である点が確定した。しかし、アク・ベシム遺跡は、城壁に囲まれた様相の異なる2つの都市遺跡によって構成されており、唐が造営した都城がどの部分に該当するか、が確定していなかった。この点に関しては、後述するように、杜懷寶碑が東側のラバトで発見された点に加えて、2015年以降のラバト中枢部の発掘によって大量の唐代瓦塼や建物遺構が検出されるに及び、ラバトこそが唐碎葉城である点がほぼ確定しつつある。

アク・ベシム遺跡の位置・歴史を踏まえた上で、その平面配置について、用語定義も含めて概説しておきたい。図3上にあるように、アク・ベシム遺跡は連接する2つの都市と、その外側をめぐる外壁と溝で囲まれた最大南北長3.9km、最大東西長5.6kmの不整形な範囲で構成される。特に2つの都市遺跡に関しては、ロシア人研究者が、伝統的に図3上の赤い部分を「Shakhristan（シャフリスタン）」、その西南部に位置し

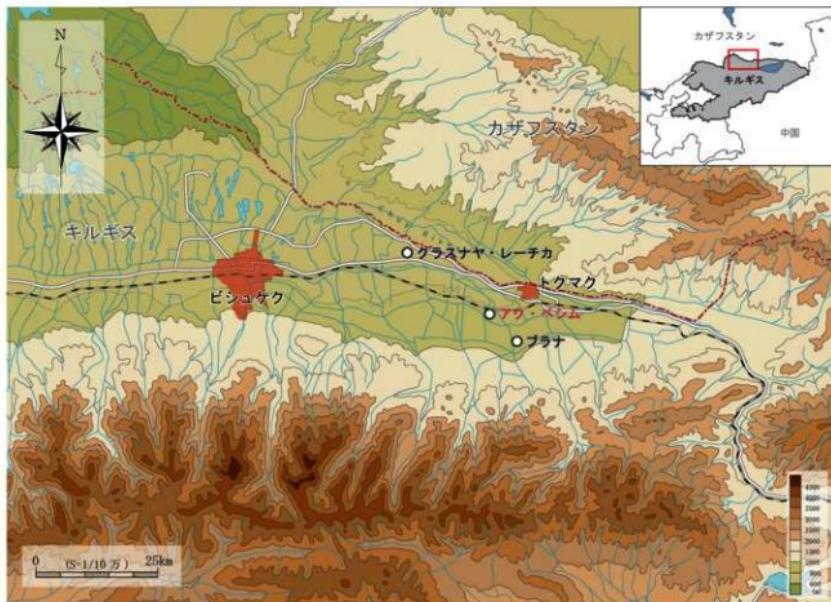


図1 キルギス共和国アク・ベシム遺跡の位置



図2 アク・ベシム遺跡ラバト地区出土の「杜懷寶碑」

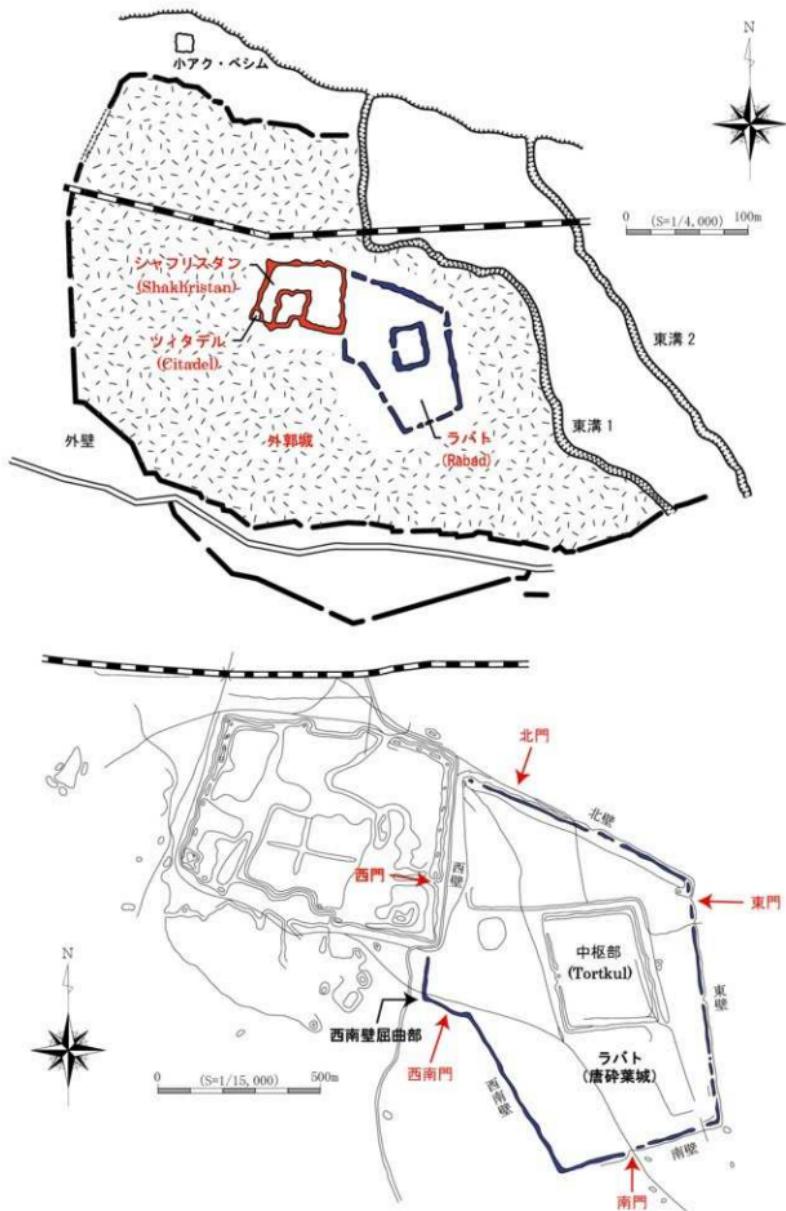


図3 アク・ベシム遺跡の平面配置と地点名称

て高い立地を示す部分を「Citadel（ツィタデル）」、東側の青い部分を「Rabad（ラバト）」と呼称してきた。その中で、「Rabad」は中国系の要素が強いことから、城内の仏教寺院を発掘したベルンシュタムによって「契丹区」とも呼称され、その中央の区画は「Tolrtkul（トルトクリ・四角形）」と呼ばれてきた。近年では、「Rabad」は「郊外区」を示す言葉であることから、キルギス人研究者は、この区画を「Shakhristan 2（第2シャフリストン）」と呼称し、外壁で囲まれた外側の区画を「Rabat」と呼ぶことを提唱しており（山内ほか2016・アマンバエヴァほか2017）、帝京大学も同じ定義を採用している（山内ほか2019・2020）。

一方、これらの区画の中国語訳では、ケンジエアフメトが『資治通鑑』の記載を採用し、「子城（Shakhristan）」、「宮城（Citadel）」、「羅城（Rabad）」と呼称している（ケンジエアフメト2009）。ソグド都市と中国都城が連接する特異な遺跡群を、中国都城の重層構造を示す概念で定義するケンジエアフメトの用語には問題が多いと考えるが、区画それぞれの年代や機能が考古学的に明らかになっていない研究段階で、適切な定義が難しい点も事実である。近年のクズラソフの中国語訳本では、「Shakhristan（沙赫伊斯担）」、「Citadel（城堡）」、「Rabad（拉拜得）」のように、ロシア人研究者の伝統的な呼称に基づいた中国語訳を採用している（科茲拉索夫2019）。研究上の混乱を避けるため、伝統的な名称を変更するのには慎重であるべきという立場から、本論でも図3上のように「シャフリストン（Shakhristan・沙赫伊斯担）」、「ツィタデル（Citadel・城堡）」、「ラバト（Rabad・拉拜得）」の用語を採用する。なお、ラバト中心の「Tolrtkul」は「中枢部（城倉ほか2016）と呼称する。さらに、外壁で囲まれたエリアをケンジエアフメトは「关厢（城門外の大路に形成される街区）」とするが、これは商業機能が発達した宋・元以降の都市で使用される用語であるため、本論では唐代都城の一般的な用語である「外郭城」を採用する。以上の定義に基づけば、アク・ベシム遺跡は、「①外郭城」、「②シャフリストン（ツィタデルを含む）」、「③ラバト（中枢部を含む）」の3区域で構成される。この中で、ラバトこそ、唐が造営した「都城」と考えるので、この区画を「唐碎葉城」（図3下）と呼称する。

外郭城は、北壁・西壁・南壁、および東側の2本の南北溝で区画される広大なエリアを指す（図3上）。この外壁に囲まれた区画が都市としての居住エリアと考えられているものの、具体的な年代・性格・構造などは不明である。外壁基部の幅は12m、高さ1.2～1.5mほどで総延長は11kmに及ぶ。外壁外の北西には、小アク・ベシム（小阿克・貝希姆）遺跡と呼ばれる正方形の区画が存在するが、発掘調査が行われていないため、詳細は不明である。シャフリストンは、台形に近い四角形を呈し、北で15°ほど東にふれる。北壁約600m・東壁約500m・南壁約700m・西壁約400mとされ、城壁には角楼や馬面などの防御施設が付随している。シャフリストンは、5世紀のソグド人都市から始まり、カラハン朝まで使われた商業都市と考えられており、6世紀に及ぶ都市生活の堆積によって地表レベルが高くなると同時に、ラバトに比べても高くて強固な城壁を持つことが特徴である。図3下の青色で示した城壁がラバト、すなわち唐碎葉城の範囲である。現地形では、シャフリストン東壁をラバト西壁として共有しているように見えるが、シャフリストンはラバト廃絶後も300年以上、都市機能を維持したため、唐碎葉城（7世紀後半～8世紀初頭）が存在した時期の接続状況は不明である。ラバトは、西壁を除くと、北壁・東壁・南壁・西南壁（屈曲部を含む）で構成され、全体としては不規則な多角形を呈する。シャフリストン東壁を含む5つの城壁には、各1基の門遺構が確認できるが、それ以上の数が存在していた可能性もある。衛星画像の分析で得た実測長を示すと、北壁819m・東壁735m・南壁481m・西南壁594m（+屈曲部東西壁163m・南北壁156m）になる。ゆがんだ四角形を呈する中枢部は、北壁237m・東壁306m・南壁250m・西壁312mを測る（城倉ほか2016）。

以上、シャフリストンとラバトは、それぞれ異なる歴史的背景と設計原理由持ち、存在時間幅が異なる点が重要である。5・6世紀のソグド人都市からカラハン朝まで使用されたシルクロード商業都市のシャフリストン、その東側に7世紀後半～8世紀初頭の限られた時期のみ、内外二重構造を持つラバトが連接して存在したと推定できる。中軸線を持ち、南面するという唐代都城と同じ重圓構造を持つラバトこそ、唐碎葉城と考えられる。残念ながら、ソビエト時代の耕作によって既に城壁の大半が消失しているため、その復原は困難を極めるが、①1960年代に撮影されたCORONA・航空写真による解析、②測量・地中レーダー探査、③発掘、などの手段によって、唐碎葉城の全体像を把握していく必要がある。

## 1-2 文献に記載される唐碎葉城

唐碎葉城は、漢語文献中にいくつかの記載がある。以下、齊藤茂雄の整理に基づき、本論に関連する主要な記載（中文）のみを列挙して整理する（齊藤 2016）。

### ①『大唐西域記』卷1

“清池西北行五百余里，至素叶水城。城周六七里，诸国商胡杂居也。土宜麌·麦·葡萄。林树稀疏。气序风寒，人衣毡褐。碎叶已西数十孤城，城皆立长。虽不相稟命，然皆役属突厥。”

### ②『大慈恩寺三藏法師傳』卷二

“循海西北行五百余里，至素叶城。逢突厥叶护可汗。方事畋游，戎马甚盛。（中略）既与相见，可汗欢喜云，‘暂一处行，二三日当还。师且向衙所’。令达官答摩支引送安置。（中略）自此西行四百余里，至屏聿。此曰千泉。地方数百里，既多池沼，有丰富木。森沈涼潤，既可汗避暑之处也。”

### ③『旧唐書』卷一八五上「良吏传上 王方翼」

“又筑碎叶鎮城。立四面十二門，皆屈曲作隱伏出沒之狀。五旬而畢。西城諸胡竟來觀之，因獻方物。”

### ④『旧唐書』卷六「則天武后本紀載初元年」

“秋七月，（中略）有沙門十人為擴大云經，表上之，盛言神皇受命之事。制頒於天下，令諸州各置大云寺，總度僧千人。”

### ⑤『通典』卷一九三「邊防九 西戎五 石國條 所引“杜環經行記”」

“又有碎叶城。天寶七年，北庭節度使王正建薄伐，城壁摧毀，邑居零落。昔交河公主所居止之處，建大云寺，猶存。”

①は、貞觀4年（630）に「素葉水城」を訪れた玄奘の著名な記録である。イシク・クル湖より西北500里あまりに位置する「素葉水城」、それを含む諸都市がそれぞれの「長」を立てながら、西突厥に服属していた点が記載されている。玄奘が訪れた「素葉水城」は、ソグド人都市であるシャフリストンと思われる。②の資料には、玄奘が「素葉城」を訪れた際、西突厥のヤブグ可汗に会ったこと、その本拠地が碎葉城から400里あまり離れていたことが記載される。シルクロードに展開する独立商業都市が、交易の安全を確保するために、遊牧民族の西突厥に服属していた支配構造が読み取れる。その後、西突厥は内部分裂によって急速に弱体化し、唐が西域に進出する。貞觀14年（640）には、高昌に安西都護府を設置し、貞觀22年（648）には、クチャを攻略して安西都護府を移置し、安西四鎮を設置した。その後、タリム盆地は唐と吐蕃が勢力を争うことになるが、調露元年（679）には、③の資料にあるように、唐の王方翼によって碎葉鎮城が造営された。50日という短期間で城壁が築造され、四面には12門を設置し、それらの門は屈曲しており兵の出撃・退却を隠す形状をしていたと記載されている。12門は『周礼』以来の理想の王城にみられる門数を示す常套句と思われるが、短期間に造営された点、「屈曲する特殊な城門」を持つ点は、実際の遺構を観察する上で、示唆的な記載である。中軸線と重圍構造という中国都城の特徴を持ちながら、防御性の高い城壁を構築してシャフリストンに接続するラバトこそが唐碎葉城と考えれば、③の記載はラバトの外城壁を示す可能性が高い。その後、唐碎葉城は吐蕃によって攻略されるが、長寿元年（692）に再度、唐が奪取する。しかし、長安三年（703）にはトルギュシュが碎葉を攻略し、唐の実質的支配は終了した。つまり、唐が碎葉城を建設し、実質的な勢力下に置いていたのは、679～703年の限られた期間と考えられる（柿沼 2019）。

唐碎葉城に関する記録は、このように非常に限られているが、もう一つの重要な論点として大雲寺の記載がある。④の資料にあるように、武則天の天授元年（690）に両京（洛陽城・長安城）および諸州に大雲寺を建立するよう勅令が出された（趙超・邸亮 2016など）。この大雲寺は唐碎葉城にも造営されたようで、タラス河畔の戦いに從軍して捕虜となり、宝応初年（762）に帰国して『經行記』を著した杜環を利用した⑤の『通典』の大雲寺の記載がよく知られている。⑤には、天寶7年（748）に北庭節度使の王正見が碎葉城を攻撃したこと、かつて交河公主が居住した場所に大雲寺が建立され、現存していることが記載されている。杜環が碎葉を訪れたのは、天寶十年（751）とされるが、唐の実質的支配が終了した703年以降も大雲寺は法燈を絶やさなかったことがわかる。アク・ベシム遺跡では、シャフリストン南の第1佛教寺院、第2佛教寺院、およびラバト内のペルンシュタムが発掘した寺院、3つの佛教寺院が存在する。研究史上は、後

述するように第1佛教寺院を大雲寺とする説があるものの、第1・第2佛教寺院では在地系の遺物が主体を占めるのに対して、ベルンシュタムが発掘した佛教寺院はラバト内に位置し中国系遺物が大量に出土した点が知られる。以上の状況からすれば、ベルンシュタムの調査した寺院が唐大雲寺の第一候補地とするのが妥当だと考える。

以上、漢語文献に記載される碎葉城について、簡単に整理した。碎葉城に関する文献記載は極めて限られており、唐碎葉城の様相を明らかにするには、測量・発掘に基づく遺構の分析、あるいは出土した遺物の分析という考古学的研究を進める必要がある。また、文献記載に基づいて遺構・遺物を解釈するのではなく、あくまでも考古学的な作業の蓄積に基づいて唐碎葉城の歴史的位置を考究すべきと考える。

### 1-3 アク・ベシム遺跡に関する調査研究略史

アク・ベシム遺跡は、ベルンシュタムの発掘調査から數えても80年以上の歴史があり、その間、ロシア人研究者を中心に多くの調査研究が蓄積されてきた。「どのような問題意識と歴史認識を持って対象遺跡を調査するか」が考古学では重要であり、それによって必然的に手段や方法論が異なってくる。このような認識に基づけば、アク・ベシム遺跡の調査研究は、以下の3段階に整理できる。

【第1段階】1893～1952：バルトリド・ベルンシュタムの「アク・ベシム＝バラサグン説」に基づいて調査が進んだ段階。／【第2段階】1953～2014：クズラソフ・ジャブリン・セメノフらが「アク・ベシム＝Suyab説」を確定し、シャフリスタンの調査研究を進めた段階。／【第3段階】2015～：東京文化財研究所・帝京大学を中心として、「ラバト＝唐碎葉城説」に基づいて、ラバト中枢域の調査研究が進んでいる段階。

以上の中で、第1・2段階（～2014）までの調査研究史については、ケンジェアフメトによる中国語の詳細な整理があるので（[肯加哈买提 2017](#)）、それを参考に主要な成果についてまとめてみる。

アク・ベシム調査の第1段階は、サンクトペテルブルグ大学のバルトリドが、チュー河流域の調査を開始したことに始まる。バルトリドは、アク・ベシム遺跡を、カラハン朝（940年頃-1212）と西遼（1124-1218）の都、バラサグンと推定した（Bartold1966）。このバルトリドの「アク・ベシム＝バラサグン説」を支持したベルンシュタムは、1939・40年にラバト内の佛教寺院を発掘し、大量の中国系遺物の存在からラバトを「契丹区（Kidanskij Kvartal）」と呼称した（Bernshtam1950）。ベルンシュタムは、ラバトを東方から来た契丹人（耶律大石が建国した西遼＝カラキタイ）が建設したものと推定し、11～12世紀の年代を推定した。この「契丹人説」はベルンシュタム自身が後に修正し、9世紀にトルファン・高昌から来た「回鶻人説」を提唱した。その後、1982年にベルンシュタムが発掘した寺院跡周辺から杜懷宝碑が発見（正確な出土場所は不明）され、「アク・ベシム＝バラサグン説」が完全に否定されることになる。現在の研究では、バラサグンはプラナ遺跡に比定されており、アク・ベシム遺跡も11世紀半ばには衰退することが判明している。すなわち、1134年、耶律大石の西遼がカラハン東王朝（1041年に東西分裂）を支配下におさめた段階では、すでに中枢はプラナに移動しており、アク・ベシムはすでに都市として機能していない点が確実である。このように研究の第1段階は、「アク・ベシム＝バラサグン説」に基づく解釈によって、研究上、多くの混乱を抱える段階にあったといえる。

研究の第2段階は、ベルンシュタムの後に組織的な発掘を行ったロシア人考古学者クズラソフが始まる。1953～54年、クズラソフは、シャフリスタン中央・ラバトのキリスト教会・外郭城のキリスト教（マニ教）墓地・第一佛教寺院・静寂塔の発掘を行った。その成果から、アク・ベシム遺跡の都市としての機能は11～12世紀までは存続していないと考え、カラハン朝・西遼王朝のバラサグン説を否定した（Kyzlasov1959）。1955～58年には、ジャブリンが第2佛教寺院を発掘調査した（Zyablin1961）。1982年には、ベルンシュタムが発掘した佛教寺院跡周辺とされる場所で杜懷宝碑が発見され、「アク・ベシム＝Suyab」であることが確定し、ラバトを唐碎葉城と考える説が有力となった。1996～98年には、セメノフがシャフリスタン東南部のキリスト教会・ツィタデルを発掘した（Semenov2002）。1997年には、第2佛教寺院付近で漢文石碑の残片も発見されている（[周伟洲 2000b](#)など）。以上の研究第2段階までの成果は、ケンジェアフメトが詳細に整理した上で、特に文献資料を中心として「中国史」からみたアク・ベシム遺跡の位置付けを総括してい

る（[肯加哈买提 2017](#)）。

2015 年以降、日本の東京文化財研究所・帝京大学がキルギス共和国国立科学アカデミーと共同して進めているラバト中枢部の発掘調査によって、研究は新しい局面（第 3 段階）に進んでいる。1982 年の社壇宝碑の発見によって、ラバトが唐碎葉城である可能性が多くの研究者によって認識されるようになったが、ベルンシュタム以降、ラバトの発掘は進んでおらず研究が進展してこなかった。また、1960 年代には完存していた城壁はすでに耕作によって消滅し、東壁・南壁の一部を除いて地表に痕跡を失ったラバトの研究は容易でない状況にある。しかし、近年の中中枢部の発掘調査によって、唐の瓦壇類が大量に出土し、建物遺構も検出されるなど、遺構・遺物を考古学的に分析できる状況になってきた（[城倉ほか 2016・2017・2018・2020、帝京大学文化財研究所編 2019、山内ほか 2018・2019 など）。](#) アク・ベシム遺跡の調査研究は、当面、唐碎葉城の構造把握と中原地域との直接比較が重要な課題になると予想できる。

#### 1-4 アク・ベシム遺跡の発掘された主要遺構

アク・ベシム遺跡の各時代における遺構の特色を把握するため、考古学的な調査成果をまとめる。[図 4](#) には、山内が整理した調査史（[山内ほか 2019](#)）に基づき、シャフリスタン（青色）、ラバト（赤色）、外郭城（緑色）毎の発掘一覧表を作成した。中でも、重要な遺構を検出した調査として、①ツィタデル、②ラバト内仏教寺院、③ラバト内キリスト教会、④シャフリスタン内キリスト教会、⑤第 1・2 仏教寺院、⑥ラバト中枢部東壁、⑦ラバト中枢部北辺、⑧シャフリスタン東壁・ラバト南壁、以上の 8 地点の調査成果をまとめる。なお、発掘以外の成果として⑨ラバトの測量成果に関しても、言及しておきたい。

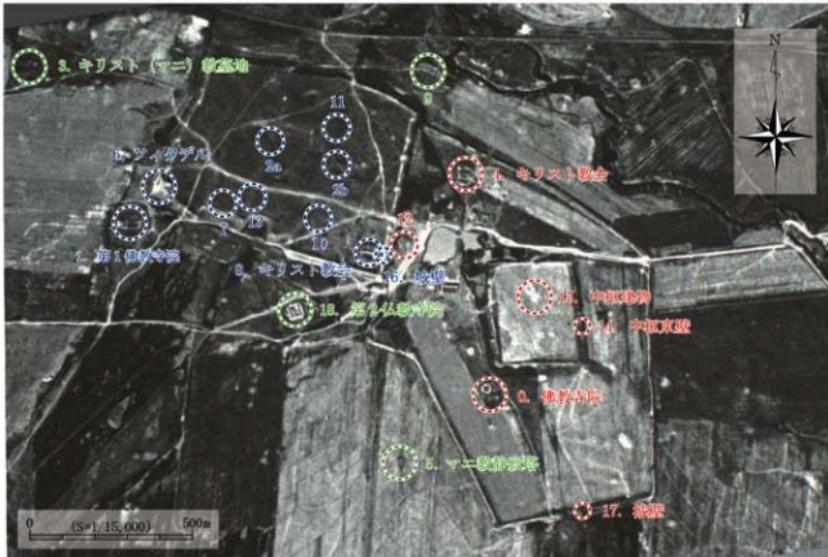
ところで、本論の執筆時（2020 年 1～3 月）には、アク・ベシム遺跡の研究史を纏める資料は、ロシア語の原典を除くと、中国語によるケンジェアフメトの著作（[肯加哈买提 2017](#)）やクズラソフの中国語翻訳本（[科茲拉索夫 2019](#)）に限られていた。その後、帝京大学による精力的な翻訳作業（[川崎ほか 2020・山内ほか 2020 など](#)）が蓄積されるなど、急激に日本語での研究環境が整備されている。

##### （1）ツィタデルの調査成果

ツィタデルは、シャフリスタンの西南隅に位置する。報告者は外壁を 2 時期、建物遺構を 4 時期に区分している。[図 5](#) では、シャフリスタン本来の城壁を青色、建物外壁を赤色で色分けした。当初のツィタデルは、シャフリスタン西・南城壁を利用しており、その後、西側に増築されたと考えられている。中庭（院落）を囲むように小さな部屋が並ぶ建物形式で、建物はバフサ（粘土）とキルビーチ（日干煉瓦）で構築されていたようである。7～8 世紀頃に建造され、11 世紀頃まで存続したと指摘される。ツィタデルの機能については諸説あるが、都市「統治者」の居館とする説が有力である。

##### （2）ラバト内仏教寺院の調査成果

ベルンシュタムが 1939・40 年に発掘した仏教寺院跡である。シャフリスタン南の第 1・2 仏教寺院に対して、この仏教寺院には名称がないため、本論では「ラバト内仏教寺院」と呼称しておく（ケンジェアフメトは「ベルンシュタム遺跡」、帝京大学は「第 0 仏教寺院」と呼称する）。ラバト内寺院については、その場所が報告書で明示されていないが、1960 年代に撮影された CORONA 衛星画像によると中枢部西南に位置することがわかる。東西 64m × 南北 113m の区画で、[図 6](#) の簡単な等高線図に示されるように、当時は城壁に囲まれた高台を有する区画だったようである。ベルンシュタムは、そのやや北側に発掘区を設けており、1 号遺構（僧房）、2 号遺構（仏堂）と呼称している。当時の略図だけでは情報に限界があるものの、区画の中央の高まりを中心的な建造物と考えれば、中軸線を持って南面（坐北朝南）する伽藍配置を持つ中國式仏教寺院（[龔国强 2010](#)）と推測できる。唐代において伽藍配置が確定している寺院は少ないが、唐長安城の青龍寺・西明寺（[中国社会科学院考古研究所 2015](#)）は、北魏洛陽城（[中国社会科学院考古研究所 1996・钱国祥 2017](#)）や北齊鄆城彭城佛寺（[中国社会科学院考古研究所等 2010a](#)）など北朝の皇家寺院の影響を受けて、中軸線上の主要殿が南面する構造を持つことが知られる。特に、中原地域では、北朝期の塔を中心とした「前塔後殿單院式」の平面配置から、隋唐期の中軸上「多院多殿式」への変化が指摘される（[何利群 2014p404](#)）が、ラバト内寺院も平面図を見る限り、中軸が存在する唐代の伽藍配置と共通する可能性が高い。また、第 1 仏



発掘番号	調査年	発掘内容	報告書
AKB-0	1939-1940	ラバト。仏教寺院	Bernbaum 1950
AKB-1	1953-1954	シャフリスタン外南、第1仏教寺院	Kyzlasov 1959
AKB-2a, b	1953-1954	シャフリスタン、層序確認	Kyzlasov 1959
AKB-3	1953-1954	シャフリスタン外西、キリスト(マニ教)墓地	Kyzlasov 1959
AKB-4	1953-1954	ラバト、キリスト教会・墓地	Kyzlasov 1959
AKB-5	1953-1954	ラバト外西、マニ教静寂塔	Kyzlasov 1959
AKB-6	1996-1998	シャフリスタン、フィタデル	Semenov 2002
AKB-7	1997-1998	シャフリスタン、建物	Semenov 2002
AKB-8	1997-1998 2009	シャフリスタン、キリスト教会	Semenov 2002 L. M. Vedutova 発掘/未報告
AKB-9	1997	シャフリスタン外北、建物	L. M. Vedutova 発掘/未報告
AKB-10a, b, c	2006-2008	シャフリスタン、建物	Vedutova and Kurimoto 2014
AKB-11	2006-2008	シャフリスタン、建物	Vedutova and Kurimoto 2014
AKB-12a, b, c	2009	ラバト	Vedutova and Kurimoto 2014
AKB-13	2011-	シャフリスタン、街路	山内ほか 2016, 2017, 2018
AKB-14	2015	ラバト、中枢部東壁	城倉ほか 2016, 2017, 2018
AKB-15	2016	ラバト、中枢部北辺建物	山内ほか 2018
AKB-16	2017	シャフリスタン、東城壁	山内ほか 2018
AKB-17	2017	ラバト、南城壁	山内ほか 2018
AKB-18	1955-1957 2018	シャフリスタン外南、第2仏教寺院	Zyablin 1961 山内 発掘/未報告

※赤色(ラバト)、青色(シャフリスタン)、緑色(城外)。

※一覧表は(山内ほか2019)より作成。上図の番号は、下表の発掘番号と対応する。

図4 アク・ベシム遺跡の発掘地点と内容

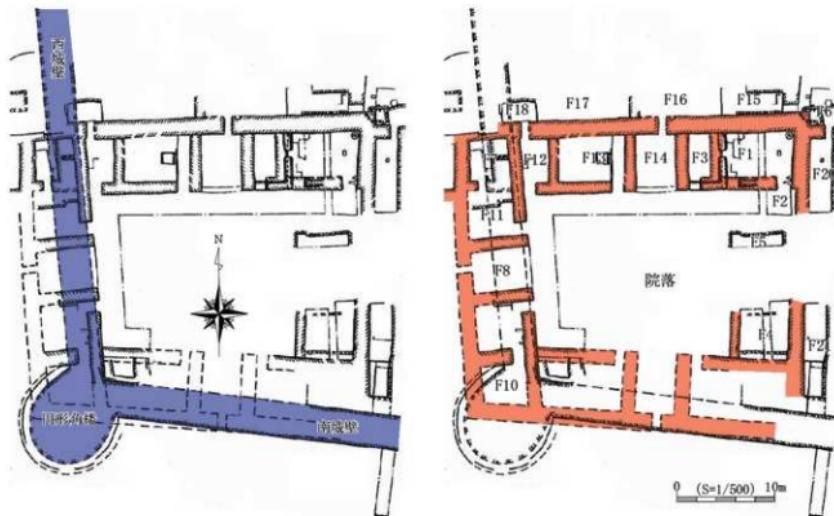


図5 ツィタールの発掘成果（左：城壁／右：建物外壁）



図6 ラバト内佛教寺院の発掘成果

教寺院は東面、第2佛教寺院は北面して、いずれもシャフリスタンの南正門の方角を向くのに対して、ラバト内寺院はラバト西南壁と軸線を一致させて南面する点も注目できる。後述するように、ラバト内は道路によっていくつかの区画に分割されるが、その区画内で規則的に配置される在り方は、中国都城の里坊内に展開する佛教寺院と共通する特徴を示す（宿白 2009）。さらに、CORONA衛星画像によると、この区画のすぐ北側にも軸線を同じくする正方形の区画が存在していたようで、両者は何らかの関連する遺構の可能性がある。仮に、両者が全く別の機能を持つ空間だったとしても、ラバト内寺院の64m×113mという区画は、第1・2佛教寺院の規模をはるかに上回り、同時期に存在したと思われる3つの佛教寺院でも別格の規模を持っていたと考えられる。なお、図6に示したように、蓮華紋瓦当・長方埠・石仏などの大量の中国系遺物の出土もラバト内寺院の特色である。この蓮華紋瓦当は、近年の中核部の発掘で出土している瓦当と同じ典型的な唐様式である。

以上のように、寺院の規模、城内区画において規則的に南面する伽藍配置、杜懷寶碑の存在など、様々な要素から考えて、ラバト内寺院こそが唐大雲寺の可能性が極めて高いと考える（川崎ほか 2020など）。なお、大雲寺に関しては、唐の碎葉城放棄後、少なくとも8世紀中葉までは法灯を絶やしていないことが知られる。アク・ベシム遺跡の都市としての歴史自体が、11世紀半ばまでと考えられることから、ペルンシュタムが当初想定した西遼時期の中国の影響が存在することは理論上あり得ない。その中で、注目されるのは、クジエムヤコの報告にある瓦である。図6の個体6は、明らかに（垂尖）滴水瓦である（Kozhemyako 1959）。高義夫がB型滴水と呼称する形式で、中国でも唐代には存在しておらず、五代十国期の南漢（917～971）などで原型が生まれ、北宋（960～1125）期に至って出現したとされる遺物である（高義夫 2016）。なお、近年では、佐川正敏が北宋期の「平瓦葺き」に使用された「伏臥式垂尖形軒平瓦」、西夏が創製した「仰臥式垂尖形軒平瓦（典型的な滴水瓦）」を区別し、その展開を予察的に整理している（佐川 2020）。現段階では、現物資料を確認することができず、全体の出土量の中で滴水瓦がどの程度出土しているのかも確認できない。そもそもこの個体に関しては、出土地も不明なため、可能性を指摘する程度にとどまるが、大雲寺が北宋期まで法灯を絶やさず存在した可能性も考慮しておく必要がある。しかし、アク・ベシム遺跡で出土している中国貨幣は唐（開元通宝・乾元重宝・大歷元宝）を中心とする点からすれば、大雲寺が北宋期まで法灯を絶やさなかったとしても、中原地域との交流は非常に限られたものと推察される。

### （3）ラバト内キリスト教会の調査成果

クズラソフが調査したキリスト教会は、ラバトの北辺に位置する。東西方向に軸線を持ち、東西長36m、南北幅15mを測る。図7に示したように、教会西部の中庭、東部の聖堂・洗礼堂で構成される。西側の中庭

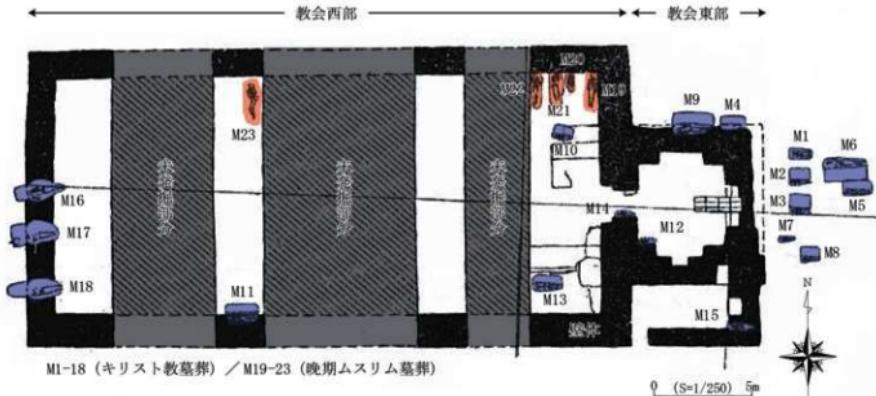


図7 ラバト内キリスト教会（墓地）の発掘成果

は、東西長 27m、南北幅 12m で回廊によって囲繞される。東の中心は聖堂で東西 5.3m × 南北 4.8m の十字形を呈する。その南には東西 4.5m × 南北 2.25m の小部屋があり、洗礼堂とされる。青銅製の十字架などの宗教遺物のほか、陶器や装身具などの生活用品、貨幣などが出土している。また、教会の内外から同時期のキリスト教徒墓が 18 基検出された。教会・墓地は、8 世紀の年代が考えられている。

#### (4) シャフリスタン内キリスト教会の調査成果

セメノフが調査したキリスト教会は、シャフリスタンの東南隅に位置する。中心となる聖堂は東城壁を背後にし、西面し、ホールや中庭を通じて聖堂に至る構造となっている。**図 8** に示したように、南から A・B・C・D の 4 区画で構成される。A 区は、聖堂 (F2) とそれに至るホール (F3・F9)、それを囲む部屋で構成される。5m 四方の聖堂 (F2) では、天井や壁に装飾画が確認されている。また、F4 はワイン醸造室、F7・F8 はワインセラーだったと考えられている。B 区は、F2 と類似する十字形の部屋 (F21) を中心とし、その西側の東西 30m × 南北 18m の中庭で構成される。F29・F30 は、中庭の北側に位置する回廊だと考えられる。C 区は、中心的な部屋 (F25) と東西 31m × 南北 10m の細長い中庭で構成され、D 区はいくつかの小部屋で構成される。F25 内には 3 つの壁龕があり、金箔を用いた彩色壁画が発見されている。

出土遺物としては、十字架やソグド文字による経典などの宗教遺物、陶器や装身具などの生活用品、貨幣、武具が出土している。年代はシャフリスタン晩期の 10 ~ 11 世紀と考えられている。

#### (5) 第 1・2 仏教寺院の調査成果

クズラソフが調査した第 1 仏教寺院は、シャフリスタン南中門外の西側に位置する。**図 9 上** の平面図のように、遺構は東西長 76m、南北幅 22m で中心となる仏殿（祠堂）は西側の標高の高い地点に位置し、シャフリスタンの南中門に向って東面（坐西朝東）する。寺院は、西側の仏堂（祠堂）、中央の中庭、東の門楼で構成される。壁体はバフサ（粘土）とキルピーチ（日干煉瓦）によって築かれている。東側が入口の門楼遺

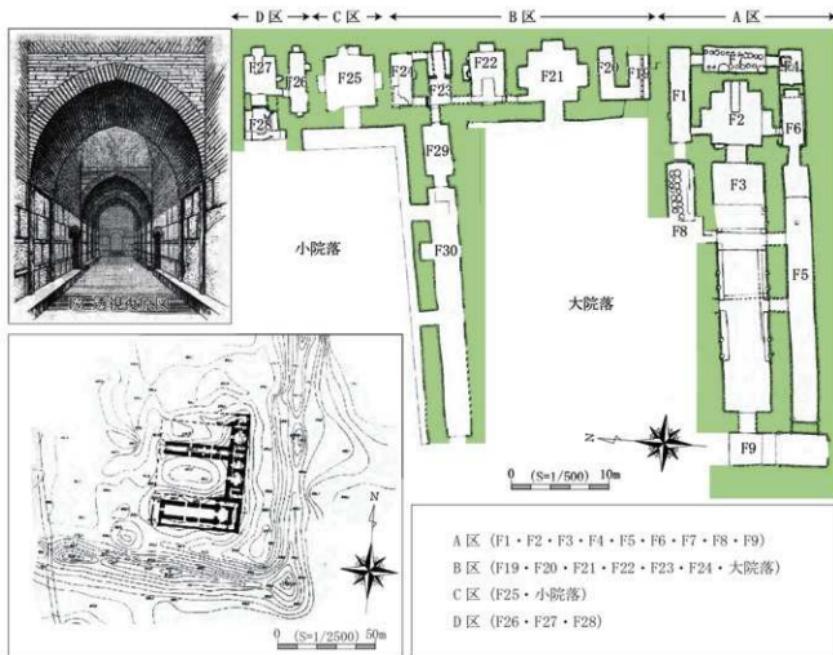
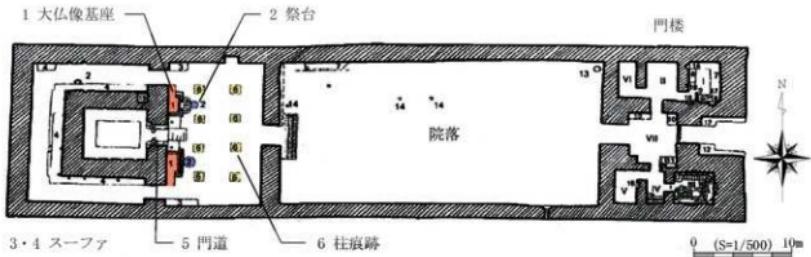
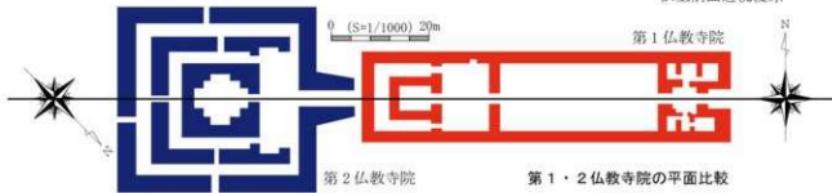


図 8 シャフリスタン内キリスト教会の発掘成果

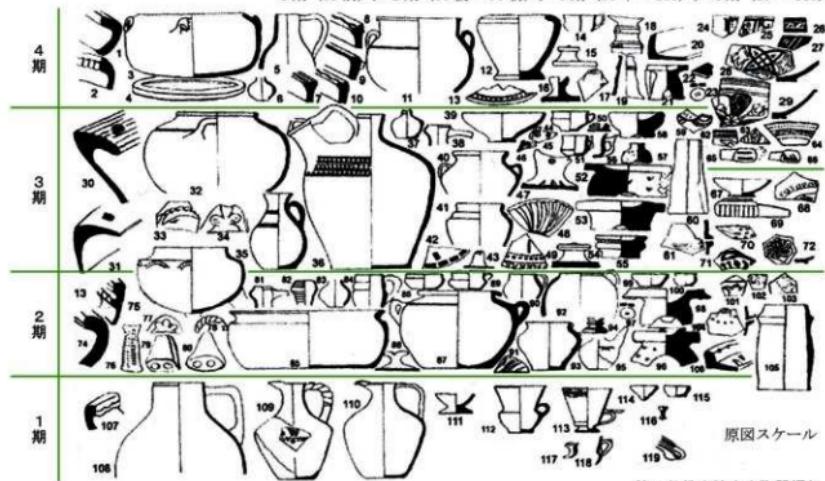


後堂前面透視復原



### 第1・2佛教寺院の平面比較

1期(8C前) / 2期(8C後~9C初) / 3期(9C中~10C) / 4期(10~11C)



第1佛教寺院出土陶器編年

図9 シャフリスタン外南：第1佛教寺院の発掘成果

構で、中央の5m四方のⅧ室に6つの部屋が接続している。門楼を抜けた西側には、東西長32m、南北幅18mの中庭が広がる。中庭を抜けると西側の仏殿（祠堂）に入ることができる。仏殿（祠堂）の東側は正殿になってしまっており、8基の柱痕跡が見つかっている。仏殿（祠堂）の中心には中堂があり、外側が回廊の構造となっている。中堂の入口脇には、积迦牟尼佛坐像と弥勒菩薩坐像の2体の塑像があった。**図9**の上から2番目の透視図が、中堂入口の復原である。出土遺物は、建築部材、壁画、仏像、生活用具、貨幣など非常に多種類に及ぶ。壁面を飾った青銅製プレートも著名である。報告者は、**図9下**の陶器編年で4期の変遷を示しており、7世紀後半～8世紀前半に創建され、11世紀まで継続して使用された（仏教寺院として機能したのは、100年程度とされ、その後は遊牧民族が居住したとされる）と考えている。

クズラソフが発掘した第1仏教寺院に関しては、イギリスのクローソンや中国の張廣達によって、唐大雲寺である可能性が指摘され（Clouston1961、張廣達1979・1995）、クズラソフもその成果に基づいて寺院の創建年代を修正している（科茲拉索夫2019）。第1仏教寺院を大雲寺とする説の主要な根拠は、寺院内で発見された弥勒菩薩坐像の存在である。690年に大雲寺造立を指示した武則天は自らを弥勒仏の化身と称していたとされ、第1仏教寺院内で唐代に流行した弥勒菩薩坐像が発見されたことこそ、この寺院が大雲寺である証拠だと各論者は指摘する。しかし、クズラソフ自身が指摘するように、第1仏教寺院は中原の様式ではなく、中央アジア様式の寺院である。なぜ大雲寺が中国様式ではないのか、については歴史的な解釈が必要になる。この点に関しては、ケンジニアメントが中国側史料から「第1仏教寺院=唐大雲寺説」を補足している（肯加哈买提2017, pp214-215）。ケンジニアメントは、高宗・武則天の陵墓である乾陵、その神道の蕃人石像の中に、「碎叶州刺史安车鼻施」の題名がある点に注目する。「安车鼻施」は突厥人、あるいは突厥化したソグド人と考えられるため、武則天の勅令に基づく碎葉大雲寺の造営には、ソグド人が重要な役割を果たしたと想定する。すなわち、漢人とソグド人が協業し、中国の影響を受けた中央アジア系寺院を造営したという点に、碎葉大雲寺の歴史的特色があると考えるわけである。

以上のように、現段階では第1仏教寺院を唐大雲寺と考える説が主体的ではあるが、ラバトが唐碎葉城である可能性が高まり、ラバト内寺院がその区画内に造営された大規模な中国式寺院である点からすると、第1仏教寺院を唐大雲寺と考える積極的な根拠は薄いと思われる。杜懷寶碑がラバト内寺院周辺で発見された点から素直に解釈すれば、やはりラバト内寺院が唐大雲寺の可能性が高い遺構だと考える。今後は、すでに消滅したラバト内寺院に関して、衛星画像や過去の出土遺物などの残された考古学資料を再検討する中で、「文献史料」のみに引きずられることなく、考古学的な解釈を進めるべきである。

第1仏教寺院の東、シャフリスタン南中門外の東側に位置し、ジャブリンによって発掘されたのが第2仏教寺院である。中央アジア様式の「回字形」仏堂（祠堂）形式で、北西に位置するシャフリスタン正南門の方角を向く。門、中庭、仏堂（祠堂）、内側回廊、外側回廊で構成される。仏堂（祠堂）全体は、東西38m、南北38.4mで正方形に近い。北側の門から寺院に入ると、東西21.3m、南北10mの中庭がある。中庭から仏堂に入ると、中央には10m四方の十字形の中堂があり、三方に壁龕が設置されている。中堂を二重の回廊が囲繞し、回廊から仏像や壁画が出土している。出土遺物としては、建築部材、壁画、仏像、生活用具、貨幣などがある。ジャブリンは錢貨から7世紀に存在した寺院と位置付け、8世紀初頭に廃絶したと指摘する。

最後に、第1仏教寺院と第2仏教寺院の平面形を比較する図を、**図9中央**に示した。両者の平面形は大きく異なるが、仏堂（祠堂）部分の「回字形」構造は共通し、ともにシャフリスタンの正南門の方角を向く点も一致する。このような「二重壁で囲まれた内陣を持つ回字形祠堂」を中心とする寺院に関しては、クラスナヤ・レーチカやアク・ベシムなどチュー川流域の都市で発見されている寺院の特徴で、タリム盆地の文化的影響を受けている様式とされる（岩井2019）。第1・2仏教寺院は、その平面形や立地・方位などから、ソグド人都市であるシャフリスタンとの関係性の中で造営された点が読み取れる。この点は、ベルンシュタムが発掘したラバト内寺院が、唐碎葉城の設計原理の中で造営された点とは対照的な事実である。このような都市・都城と寺院の関係性の点からも、唐大雲寺の候補はラバト内寺院に限られると考える。なお、近年ではクラスナヤ・レーチカ遺跡の仏教関連遺構が中国隊によって調査される（陝西省考古研究院等2020）など、考古学的な資料も増加しており、チュー川流域における都市・寺院の比較研究が進む点も期待される。

## (6) ラバト中枢部東壁の調査成果

2015年、ラバト中枢部東壁の調査を実施し、成果は概報で報告した（城倉ほか2016・2017・2018）。調査に際しては、まず、耕作で消滅したラバトの範囲を衛星画像によって復原する作業から開始した（城倉2017）。衛星画像によるラバトの復原作業の詳細は、「2-1」で詳述するので、簡単に言及しておく。現在は東壁・南壁の一部を除いて耕作によって消失したラバトだが、1967年に撮影された米軍事衛星CORONAの画像には、城壁を含む様々な情報が記録されており、唐碎葉城の全体像を把握することができる。しかし、CORONA画像は歪みも大きいため、歪みを補正したうえで現在の衛星画像と合成する必要がある。そのため、図10上のように、CORONA画像の観察によってラバトの全体像を復原した後に、PLEIADES衛星画像とGISのジオリファレンス機能を使って合成した（図10下）。その作業によって、CORONAの復原線を現代のオルソ衛星画像に正確にプロットしたのが、図11である。この図面に基づき、現地でAachen大学が設置したUTM座標による測量を実施したうえで、中枢部東壁が想定される場所に $2 \times 20\text{m}$ のトレンチを設定して発掘を実施した。

図12上が調査時の写真、図12下が実測図である。発掘の結果、トレンチのはば中央で6.6m幅の城壁の基礎部分を検出した。本来の城壁本体である上部構造はすでに削平されており不明だが、検出した壁体基部は版築ではなく、赤色の粘土（バフサ）によって構築されていた。城壁の西側では、唐代建物の外装磚と思われるA列・B列を検出した。その中でA列は、城壁の下層に入り込んでおり、その直上で凸面を上に向かた板瓦の集積構造を検出した。調査範囲が狭いため、全体の様相は不明だが、城壁西側に唐代の行政的な空間が広がっていたと推定できる。一方、東側では城壁からの流土上にカラハーン朝期と思われる日干煉瓦で構築された居住空間を検出した。カラハーン朝期には、すでに唐代の城壁は放棄されており、その一部を利用する形で城壁外に居住空間が作られている点が判明した。

## (7) ラバト中枢部北辺の調査成果

東京文化財研究所の調査を引き継いだ帝京大学は、キルギス国立科学アカデミーと共同でラバト中枢部の精力的な調査を進めている（山内ほか2018・2019など）。2017年の調査では、ラバト中枢部の北辺で南北25m以上、東西2mの瓦の帶状堆積を検出した（図13）。瓦堆積は、ラバト中枢部の軸線とほぼ一致している。また、2018年に瓦堆積の北端の一部を断ち割り調査し、埠を用いた雨落ち溝と円窓を用いた石敷を検出した。石敷は、赤茶色・青色・緑色・白色の円窓を用いて花柄を表現したもので、中国北齊鄆城の核桃園1号墓址の塔基壇北側甬道などの石敷と共通する（中国社会科学院考古研究所等2016图版肆）。唐代都城の宮城中枢部では、紋様方埠などを用いて床面装飾を施すことが一般的だが、現地の材を利用し、中国に系譜が迫れる技術で造営された遺構と思われる。今後の発掘調査で、建物遺構との関係などが明らかになることが期待される。また、出土した大量の瓦塊はいずれも唐代である点は確実で、2015年の東城壁の成果と併せて考えれば、ラバトこそが唐碎葉城であり、その政治・行政的中心が「中枢部」に位置していた点が予測できる。

## (8) シャフリスタン東壁・ラバト南壁の調査成果

帝京大学・アカデミーは、2017年にシャフリスタン東壁とラバト南壁の断ち割り調査を実施している。シャフリスタン東壁では、図14上のように、青色で示した自然堆積層の上に、十数cmの厚さの土を水平に積み重ねた「版築工法」が確認された。「版築」によって構築された壁体に対して、シャフリスタン内側は壠状に掘削されているという。報告では、シャフリスタン東壁とラバト外壁は同時に築造されたと指摘しているが、シャフリスタンの北・西・南城壁の様相やラバトとの接続関係は明らかにならない点に加え、シャフリスタンはラバト廃絶後も数百年に渡って利用されており、両者の層位による年代的関係性が明らかになっている状況とは言えず、今後の課題が多い。一方、ラバト南壁の断ち割り調査でも、図14下のような「版築工法」が確認されている。基槽の状況は不明だが、幅8m、高さ2.6mの「版築」による壁体を検出した。報告者は、壁外に掘り込み（護城河）が存在する可能性を想定している。

以上、シャフリスタンとラバトの関係性に関しては、今後の調査の課題となるが、ラバトの城壁構造が判明した意義は大きい。「版築工法」と思われる技術によって城壁が構築される点、護城河を持つ可能性が高い点、城壁の修築などが見られず短い期間に構築・使用されたと思われる点、いずれも唐碎葉城を考えるう

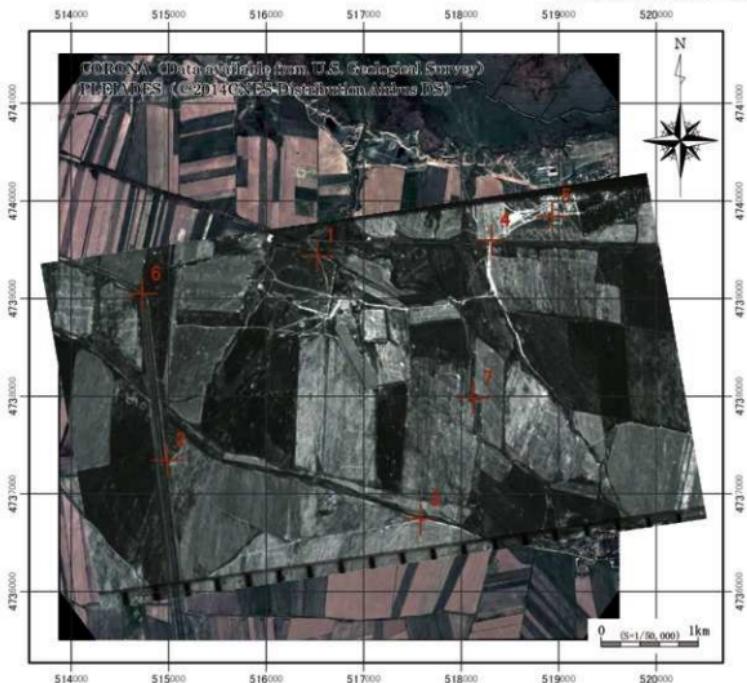


図10 唐碎葉城の復原（上）と衛星画像の分析（下）



図 11 PLEIADES衛星画像上で復原した唐碎葉城と2015年以降の発掘地点



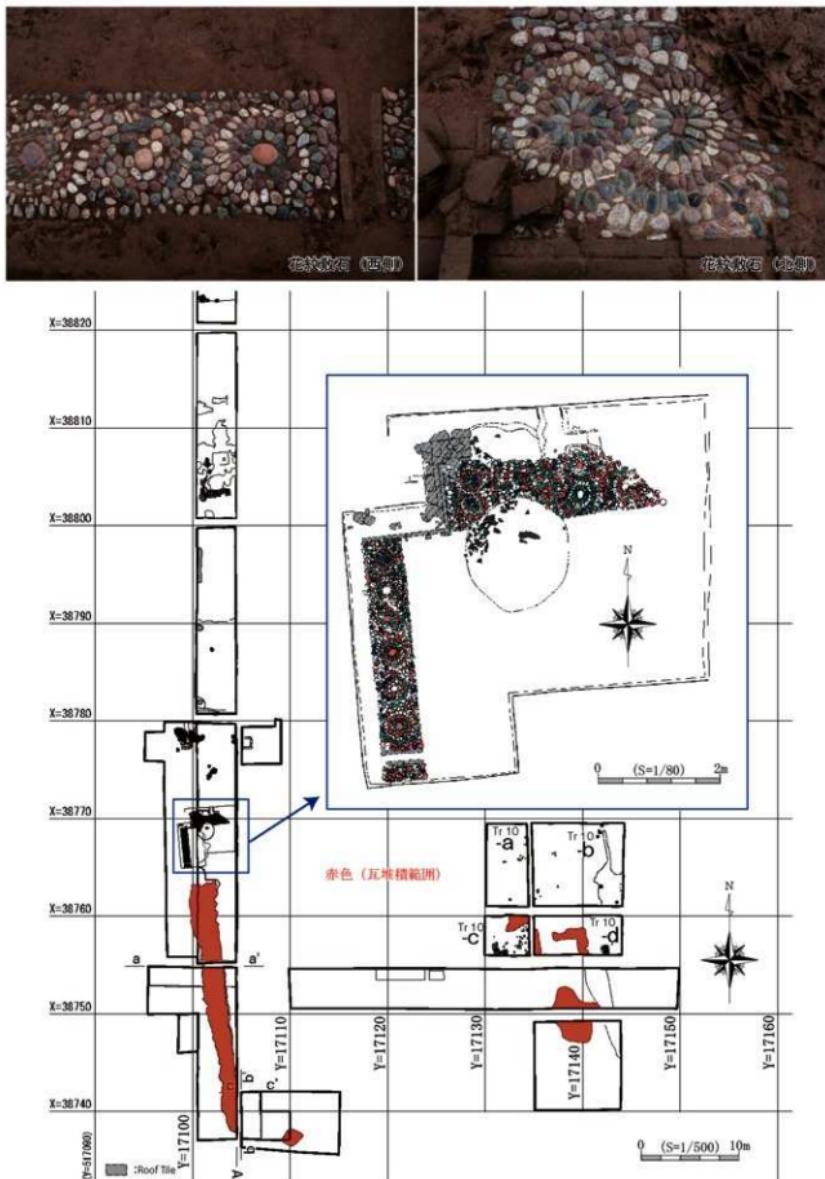


図 13 唐碎葉城中枢部北辺の発掘成果

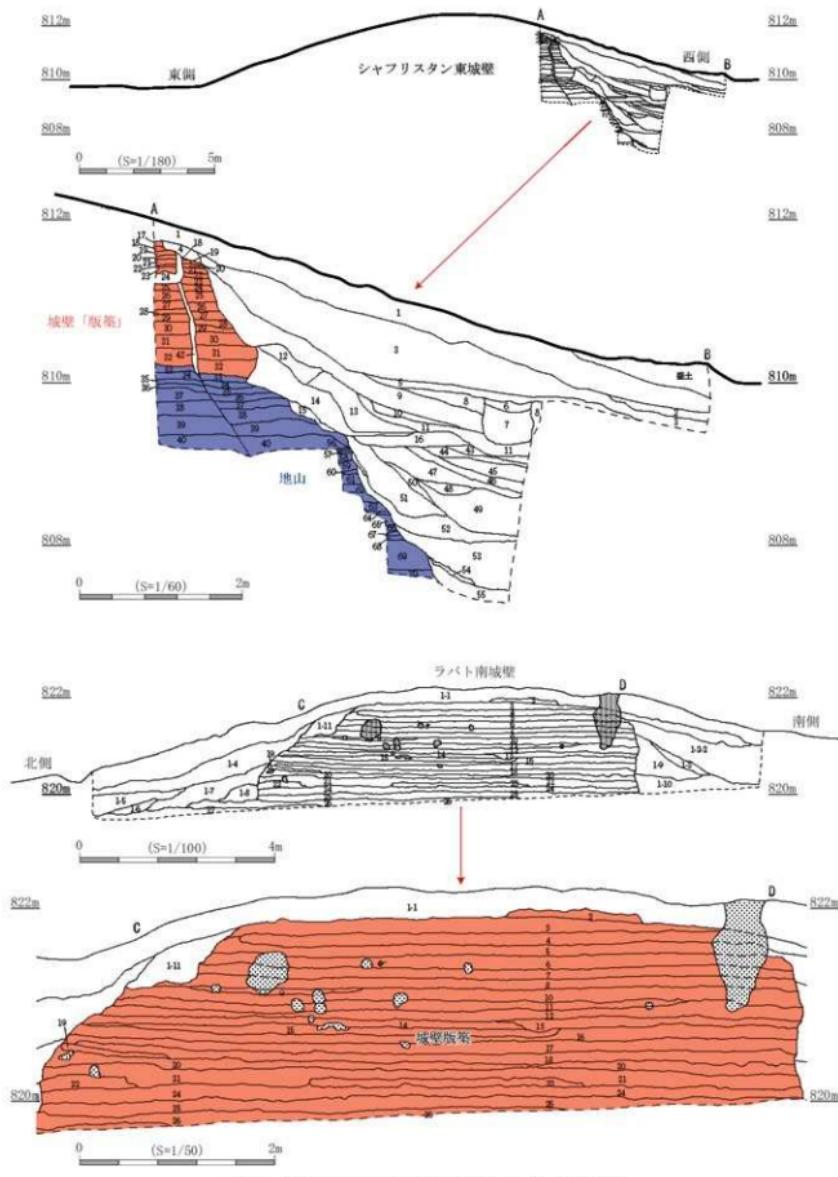


図14 シヤフリスタン東壁とラバト南壁の発掘成果

えで重要な成果といえる。

#### (9) ラバトの測量・GPR 調査

最後に8地点の発掘以外の調査として、2018年に実施したラバトの測量・GPR調査成果について言及しておく。シャフリスタンについては、アーヘン大学による測量図が存在するものの、既に耕作によって城壁が消滅しているラバトに関しては、測量図が存在していなかった。そのため、3Dスキャナーを用いた地形測量、及び内外城壁の地中レーダー探査を2018年に実施した（[城倉ほか 2020](#)）。これにより、図15のように初めてラバトの正確な地形測量図が作成でき、地表下に残存する城壁の反応を確認することができた。

### 1-5 論点と課題

アク・ベシム遺跡の調査研究史に関して、唐碎葉城に注目して整理した。ここでは、論点と課題をまとめておく。まず、アク・ベシム遺跡の調査研究史を整理したケンジェアフメトは、以下の三時期に区分した。

【早期】ソグド～西突厥の時期（5～7世紀）。

【中期】安西四鎮の時期（7～8世紀の変わり目）。

【晩期】トルギシュ・カルルク・カラハーン朝の時期（8～11世紀）。

本論が対象とするのは、安西四鎮の時期、すなわち唐碎葉城である。ベルンシュタムは当初、ラバトを西遼段階の「契丹区」と考えたが、1982年の杜懷寶碑の発見により、ラバトが唐碎葉城である可能性が高まった。その後、2015年以降の調査で、ラバト中枢部の発掘が進み、唐碎葉城の政治・行政的中心がここに所在した可能性が高くなっている。同時期に存在したシャフリスタンとの関係性は今後の課題であるが、ラバトを唐が造営した「単独の都城」として考えるのであれば、その構造をまずは考古学的に分析する必要がある。通常の都城遺跡の調査であれば、(A) 全体測量図の作成→(B) ポーリングやレーダーなどの地中探査→(C) 四周の城壁・門や中枢建物の発掘、という考古学的な手続きを踏むが、ラバトは残念ながら耕作によって地表の痕跡が消滅している。そのため、(A) (B) (C) の作業を進める前段階として、1960年代に撮影されたCORONA衛星画像を用いた全体構造の復原が非常に有効である。これが本論文の第1の課題である。衛星画像を用いて唐碎葉城の平面配置および空間構造を復原し、それを唐代西域都市や唐長安城・洛陽城などの唐代都城と比較することで、その構造的特色と設計原理を考究することが第1の目的である。中原都城と西域都市の比較視点は、孟凡人の北魏洛陽城の研究（[孟凡人 1994](#)）など非常に限られており、本論での作業は今後の東西都市（都城）の国際的比較研究においても、重要な知見をもたらすと考える。

なお、第1の作業を進めることは、唐碎葉城に関する文献史料の記載を再検討する作業でもある。すなわち、王方翼が679年に修築した「碎葉鎮城」はアク・ベシム遺跡のどこに該当するのか、690年の武則天の勅令に基づいて造営された大雲寺はどこに比定されるのか、この2点である。ケンジェアフメトは、ベルンシュタムが発掘した寺院の区画（図6左）を、王方翼が修築した官署と考え「王方翼衙署」と呼ぶ（[肯加哈买提 2017p174-175](#)）。50日という短い工期で構築可能な範囲であり、「北東と西南にある甕城を持つ門」が文献に記載される屈曲門と合致するという仮説である。しかし、この構造は寺院の伽藍に相当する範囲と思われ、「碎葉鎮城」と呼べる性質のものではない。王方翼記事を「唐碎葉鎮城」を造営した歴史的な画期と考えるのであれば、やはりラバト全体を指すと考えるのが妥当である。本論におけるラバトの構造把握は、この問題にある程度の見通しをつけることができる。さらに、クズラソフが発掘した第1佛教寺院を唐大雲寺と考える仮説（[科茲拉索夫 2019](#)）が注目されてきたが、ラバトを唐碎葉城と考えるのであれば、中国式の平面配置を持ち、大量の唐代瓦埠が出土したラバト内寺院こそが、唐大雲寺と考えるのが自然である。第1佛教寺院の年代が8世紀を主体とする点、唐の影響を受けた弥勒菩薩倚坐像が存在する点などは、むしろ、ラバト内に造営された大雲寺の影響を受けたと考え方が理解しやすい。この点に関しては、衛星画像の分析で、ラバト内寺院が都城の中でどのように位置づけられるか、を追求することで考えてみたい。

第2の課題は、中国系の出土遺物、特に瓦の年代と系譜の追求である。ラバト中枢部の調査で出土した瓦当の「様式」を検討することで、唐代瓦である点を確定する必要がある。また、建築部材の一つである瓦は、その製作技法に着目することで、「系譜」を考究できる。本論では、ラバト中枢部東城壁の調査で出土した瓦（城

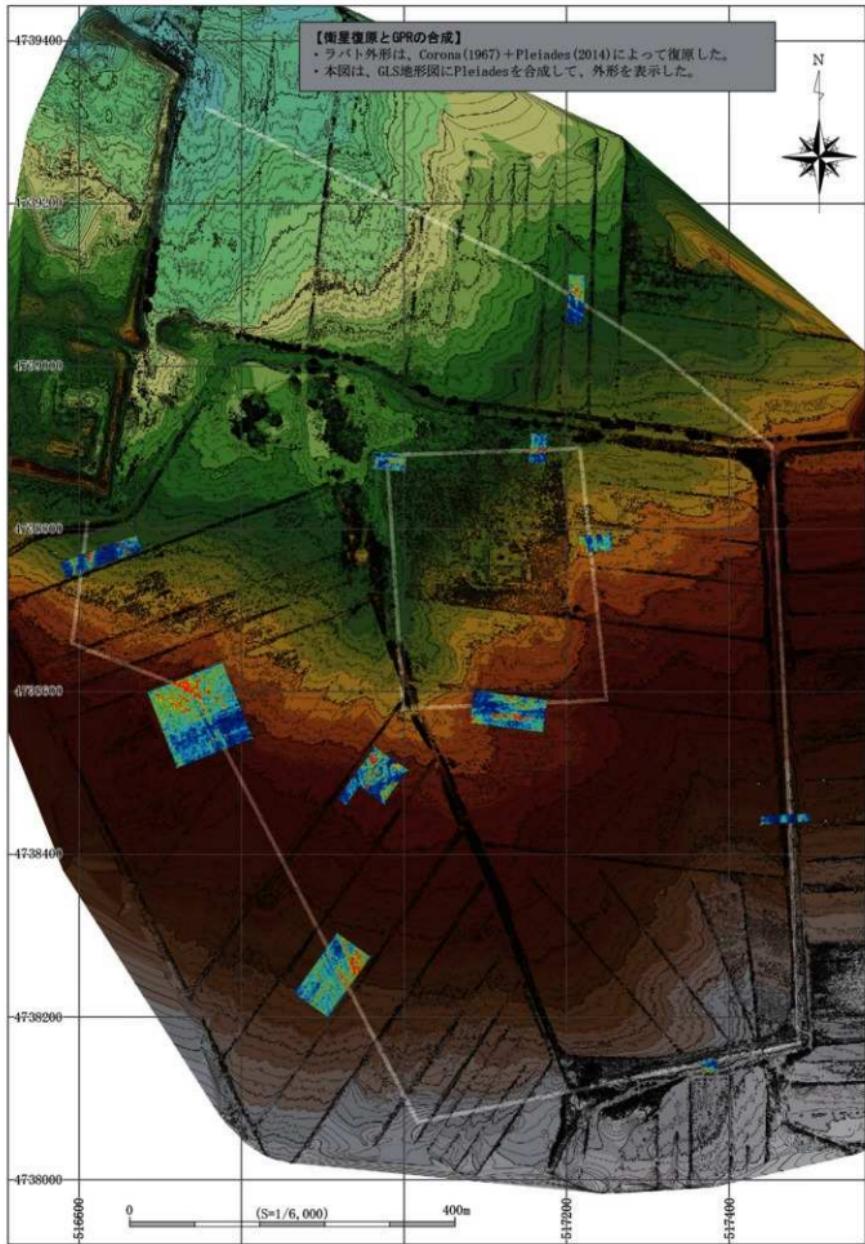


図 15 唐碎葉城の測量・GPR 調査成果

倉ほか2018) の中で、特に製作技法の検討が可能な板瓦に注目し、唐長安城・洛陽城の宮城出土瓦との比較を行う。この作業によって、唐碎葉城を造営した技術系譜に関して考究してみたい。

以上、本論では、①唐碎葉城の空間構造、②唐碎葉城出土瓦の製作技法、に注目して唐長安城・洛陽城と比較する。この2つの課題によって、唐碎葉城の歴史的位置を考究することが目的である。

## 2. 唐碎葉城の空間構造とその特色—西域都市・中原都城との比較から—

### 2-1 衛星画像の分析に基づく唐碎葉城の平面配置

都城・都市遺跡の分析における衛星画像の有効性は、歴史地理学の分野で1990年代頃から注目され、2000年代以降に考古学分野でも地理情報システム(GIS)の普及とともに広く認識されるようになった。中国都城の分野でもその有効性は認識されており(劉建国2007など)、航空写真・衛星写真が都城の構造把握の基礎資料として提示される機会も増えた(中国历史博物館遥感与航空摄影考古中心等2002・中国国家博物馆等2017など)。特に、農地化・都市化などにより既に消失した都城・都市遺跡の場合は、CORONA衛星画像と現代衛星画像の対比分析が有効である(城倉2017)。アク・ベシム遺跡のラバトの外形復原については、すでに分析を試みたことがある(城倉ほか2016p56)。その後、キルギス共和国国家地図測量局からアカデミーが購入した1966年の航空写真(帝京大学文化財研究所編2019p13写真2)を用いて、帝京大学も分析を進めている(望月ほか2020)。この航空写真是、CORONA衛星画像よりも地表面の情報が鮮明であるため、今回は同航空写真的観察を改めて行い、その成果を図10上のCORONA衛星画像に反映させた。

具体的な観察結果を示す前に、まず、分析の前提について整理しておく。ラバトはシャフリスタンと「連接」しているため、イレギュラーな平面配置と考えてしまいがちだが、シャフリスタンを除いた「単独の中国都城」として把握すると唐代都城の原則に忠実な都城だと気づく。政治・行政的な中枢(内城)と商業・居住空間としての外城をもつ二重構造、中軸線によって南面(坐北朝南)する全体配置、中枢から延伸された四方の門、これらの要素は唐代都城の原則を守っている。不規則に見えるのは、ラバトの北壁・西南壁が、ラバトとは異なる軸線を持ってすでに存在していたシャフリスタンの北壁・東壁の軸線に合わせていているからである。しかし、シャフリスタンとラバトの城壁が、共存していた時期において物理的に「接続」していたかというと、その可能性は低いと考える。航空写真・衛星写真を仔細に観察すると、ラバト北壁の西端はシャフリスタン北壁の東端よりもやや南側にあり、両者の軸線は若干ずれている。そして、後述するように両者の間は水路が存在した可能性が高い。一方、ラバト西南壁の北端、つまり屈曲部分も同じで、シャフリスタン東壁南端よりも若干西側にずれている。仮にこの場所も「接続」していないとすれば、ここには城門があり、シャフリスタン正南門へと通じる道路があった可能性も残る。このように、ラバトは都市としてのシャフリスタンに「接続」しながらも、城壁としては「接続」せず、意図的に城壁の軸線をずらして「屈曲部」を設け、その境界部分に城門や水路などの機能を持たせた可能性が高いと考える。シャフリスタンとラバトを空間的に「接続」したのは、両者の城壁ではなくシャフリスタン東壁中央門であり、この場所を通じて両者の東西道路が「貫通」することで両者の経済活動が結びついたものと思われる。中国都城において、機能的・階層的に異なる空間を「接続」させるのは、隔離機能を持つ城壁ではなく、常に道路・門である点を意識しておきたい(城倉2013)。このように、すでに存在していたシャフリスタンに新しい都城を「接続」する工夫のため、ラバトの北壁・西南壁が不規則になっただけで、ラバトの構造自体は唐代都城の原理に基づいていると考えると、その平面配置は論理的に理解しやすくなる。

以上の前提を踏まえた上で、ラバトの平面配置を都城の各要素(外城壁、内城壁、城門・道路、護城河、区画)に分けて、衛星画像の観察結果を提示したい(図10上)。

#### (1) 外城壁

外城壁は、北壁・東壁・南壁・西南壁で構成される。ラバト西壁=シャフリスタン東壁となるが、前述したように、シャフリスタン東壁は、ラバトとは全く異なる論理で構成されていると考える。なぜなら、ラバトの北壁・西南壁は、中枢部の北壁・西壁と平行しておらず<sup>4</sup>、明らかに「既存のシャフリスタンの形状」に規制を受けているからである。7世紀後半階ですでにはほぼ現状の平面形を保持していた単独のソグド人都

市=シャフリスタンに、北壁・東壁・南壁・西南壁で構成されるラバトを「付加」することで、唐碎葉城が誕生した可能性が高いと考える。ラバト以前のシャフリスタン東壁の具体的な構造は不明だが、現状では北端・南端に角楼を持ち、7基の馬面が設置されている。中央やや南寄りに門が設置されており、この門がシャフリスタン・ラバトを「横断する」東西道路上に位置し、両都市を「接続」する。「東西大路」は、ラバト北壁・東壁の交差地点にあるラバト東門から、シャフリスタン西壁中央門まで「貫通」している。シャフリスタンの中核部を横断する点は重要で、この道路こそがシャフリスタンとラバトを本当の意味で結び付けている要素だと考える。

ラバト北壁を観察すると、その西端はシャフリスタン北東隅の角楼よりも20m以上南側にある。この部分は、1967年の写真でも中枢部北西に滯水する池の水が、城外に流出する水路となっていることが観察できる。後述するように、城内における水の確保は重要な問題であり、ラバト南門から城内に引き入れた水路の城外への流出は、図15のラバト全体の地形からしても、この場所以外には考えられない。実際に衛星・航空写真でも明瞭な水路のソイルマークが観察でき、両城壁間から流出した水路は、シャフリスタン北壁を沿って西流し、中央の屈曲地点より前に北流している。短い唐の支配期間にどのような施設がこの場所にあったかは不明だが、城壁をあえて20m以上「食い違う」構造にすることで城内の排水を兼ねた何らかの防御施設（水流に沿った鉤形の甕城、あるいは北庭故城の外城北門にある「羊馬城」のような施設が想定できる）が置かれた可能性が高いと考える。なお、北壁上には外敵の攻撃に対する防御施設として、馬面が設置される。馬面は、西域都市、あるいは遼金元などの北方草原都城、高句麗都城・山城などに顕著な「城壁上で外側に突出する防御施設」である。11世紀まで存続したシャフリスタンの城壁にも設置されているが、北庭故城など唐代西域都市では、かなりの密度で設置されており、ラバトでも同じ状況だった可能性が高い。北壁の馬面は画像では不明瞭であるものの、可能性の高い3か所を明示した。

北壁と東壁が交差する地点には、角楼と思われる痕跡があり、そのすぐ南側には後述する東門が開口している。東壁には、ほぼ等間隔に馬面と思われる4か所の高まりがある。南壁には中央やや西よりに南門と思われる開口部があり、その東側に3か所、西側に1か所の馬面がある。特に、東側の3か所は外側に突出する形状が明瞭に観察できる。南壁が東壁・西南壁と交差する部分にも明瞭な角楼の痕跡がある。

西南壁は、594mの直線部分と屈曲部分（東西163m、南北153m）で構成される。直線部分の延長は、シャフリスタンの東南隅角楼の位置に合致するので、本来であれば屈曲させることなく城壁を構築できたはずである。しかし、この部分の屈曲こそは、後述する北庭故城の西門にもみられる防御性の高い門を構築するためと工夫と考えられる。王方翼の記事にみられる兵の出撃と退却を隠すための門と思われ、この門をシャフリスタンの南門に一番近い場所に置いている点は重要である。この部分は、ソグド大都市のシャフリスタンと唐碎葉城のラバト、両城の防御の要と位置付けられる。なお、このような形式の門に正式な名称は存在しないが、本論では「屈曲門」と仮称しておく。城壁を意図的に屈曲させた部分に門を設置することで、「甕城」と同様な防御効果を狙った施設と思われる。衛星・航空写真的画像上では、西南壁上に顕著な馬面の痕跡を確認できないが、屈曲部分の2か所には角楼の痕跡が明瞭に観察できる。角楼間の東西城壁のやや東よりに西南門が開口している。また、前述したように屈曲部の南北壁はシャフリスタン東南隅の角楼よりもやや西側にずれており、両城の城壁は「接合」しておらず、ここにも何らかの防御施設が位置した可能性を考えておきたい。

## (2) 内城壁（中枢部城壁）

衛星・航空写真を観察すると、ラバト中枢部の城壁も、強固な構造を持っていた点がわかる。北西隅は、明瞭ではないものの、西南隅・東南隅・北東隅には明らかな角楼の痕跡が認められる。さらに、東壁には3か所の馬面の可能性が高い突出があり、西壁も対応した位置に突出が確認できる。北壁にもわずかな痕跡があり、3か所と推定される。一方、南側中央には正門があり、その東西には1か所ずつの馬面が想定できる。後述する北庭故城も内外二重構造を呈するが、内城にも角楼・馬面などの防御施設がある。北壁 237m・東壁 306m・南壁 250m・西壁 312mのややゆがんだ平行四辺形を呈するラバト中枢部は、その防御性の高さからも、唐碎葉城の「鎮城」としての政治的・行政的中心が置かれたことが想定できる。

### (3) 城門と道路

都城の空間構造上、城門は、最も重要な要素である（[本書第II部参照](#)）。城壁で囲まれた重巻構造を呈する都城において、異なる階層的・機能的空间を「接続」する機能を持つからである。城門相互は道路によって結びつき、都城全体を区画分けすることになる。まず、ラバトの中心になるのは、外城南壁の中央やや西よりの南門、および中中枢部（内城）南壁中央の南門、この2つの「中軸正門」である。唐長安城の中軸正門は5門道、唐洛陽城の中軸正門は3門道、いずれも「過梁式」門だが、北庭故城など西域の防御性の高い都市の事例を考えれば、唐碎葉城はおそらく過梁式1門道だと推定できる。唐碎葉城に関しては、外城正門に甕城が附随する可能性は考えられるが、内城正門に關がある可能性は低い。衛星・航空写真を観察すると、外城南壁中央やや西寄りに城壁内外に膨らむ場所があり、そのすぐ東側に城壁の切れ目がある。一方、内城南壁にも中央やや西よりにほぼ同じ構造体が観察できる。そして、特にCORONA衛星画像に顕著だが、両者を結ぶように幅広の道路状のまっすぐな痕跡がはっきりと確認できる。これを「南北大路」と呼称しておく。なお、この痕跡に関しては、CORONA衛星画像では非常に明瞭だが、航空写真ではやや不明鮮明である。小麦畠の耕作単位の可能性もあるため、慎重に検討したが、現代のPLEIADES衛星画像にも同じ範囲にソイルマーカーが見える点から、40～45m（実際の道路幅+東西の空闊地を含めた幅）の幅広の道路構造と結論づけた。南北大路の中心は、城壁上の膨らみの東側開口部に位置していることから、この部分が門道で西側に規模の大きい壇台（甕城の可能性がある）が存在する門と考えておく。外城南門から内城正門までの中軸線が、幅広の南北大路で結ばれている点は、唐代都城の特徴を示すとともに、政治・行政機構としての碎葉鎮域の権威を内外に示す役割を果たしたものと思われる。

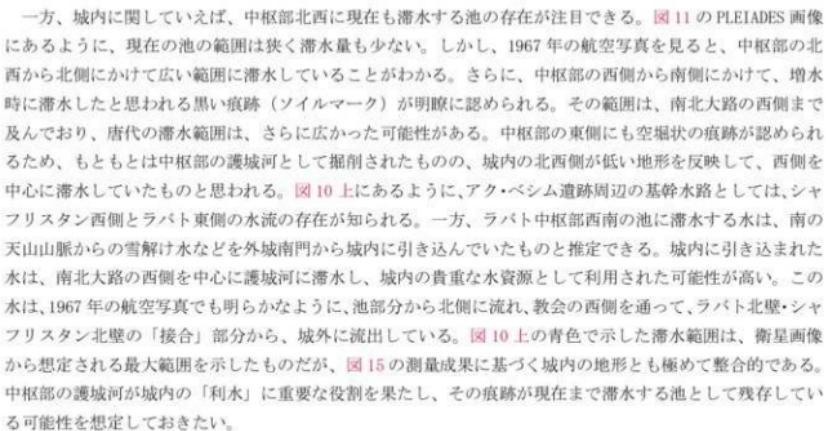
中枢部南側の南北大路に対して、北側には東西大路が確認できる点が重要である。ラバト外城東壁と北壁が交差する点には角楼が存在するが、そのすぐ南に城壁の開口部がある。城壁が屈曲する部分に門を設置したのは、やはり防御を意図したものと思われる。このラバト東門とシャフリスタン東壁東門を結ぶ道路は、現在もアク・ベシム遺跡を横断する基幹道路である。この道路を「東西大路」と仮称しておく。中枢部北側に滯水する池によって若干ゆがんでいた可能性もあるが、ラバト・シャフリスタンを結んで東西を貫通し、両城の経済活動を支えた道路だった可能性が高い。この東西大路によって、両都市は深く結びついていたのである。以上、ラバト南側が中枢部と外城南門を結ぶ南北大路で大きく「構造化」されているのに対して、北側はラバトとシャフリスタンを結ぶ東西大路で大きく空間が「構造化」されていた可能性が高い。唐碎葉城は、南側の政治・行政機構を支える南北軸、および北側の経済活動を支える東西軸で大きく構成されていたと考える。

一方、唐碎葉城の防御の中枢を担ったのは、西南壁に設置された屈曲門である。西南壁の屈曲部、角楼を結ぶ東西壁のやや東よりに開口部：西南門が位置する。衛星・航空写真では、開口部以外の特別な施設などは確認できないが、シャフリスタン東壁との接続部分に想定される防護施設と併せて、この屈曲部がシャフリスタン・ラバト両城における防護の中枢だった可能性が高い。唐の軍隊が駐屯したのは、おそらくこの区域と思われる。この西南門と「対置関係」にあるのは、外城北壁に設置された北門である。衛星・航空写真には、クズラソフの発掘したラバト内キリスト教会が明瞭に観察できるが、その北東部に城壁の開口部、北門が位置している。北門からの南北道路は、東面するキリスト教会の東側を通り、東西大路に接続していたと思われる。これは西南門内の南北道路が東西大路に接続する現象と対応し、西南門と北門がセット関係にある点がわかる。

城門同士を結ぶ主要道路は以上の3本（外城南門—内城南門、外城東門—シャフリスタン東門、外城西南門—外城北門）だが、その他にも城内道路が2本確認できる。1本目は、城内の東側にあって、外城東壁と平行して南北に走る道路である。もう1本は、外城南門から中枢部西南側のラバト内寺院の区画に接続する道路である。後述するように、中枢部西南および西側にはラバト内仏教寺院の区画とその北側の方形区画が存在するが、両区画の中央を通る南北線がCORONA衛星画像で確認できる。この道路は、北側で滯水する池の前で西側に曲がると思われるが、ラバト西南壁とシャフリスタン東壁が「接合」する部分に繋がっていた可能性がある。

#### (4) 護城河（水路）

中国都城の城壁外には、護城河が存在する。瀝水・空堀の違いはあるが、防御施設である城壁の基本要素である。後述する北庭都護府が置かれた北庭故城でも、内城壁・外城壁ともに護城河を巡らせている。特に、北庭故城の場合は、内城・外城の護城河（報告では「護城壕」）による水運が発達していたと考えられており（*刘建国 1995*）、西域都市においては護城河が城内の水利システムと深く関係した可能性が想定できる。ラバトの衛星・航空写真を観察すると、外城壁の外側には明確な護城河の痕跡は確認できないが、帝京大学の外城南壁の発掘調査では、外堀の存在が指摘されており、空堀は存在していた可能性が高い。

一方、城内に関していえば、中枢部北西に現在も滯水する池の存在が注目できる。図 11 の PLEIADES 画像にあるように、現在の池の範囲は狭く滞水量も少ない。しかし、1967 年の航空写真を見ると、中枢部の北西から北側にかけて広い範囲に滯水していることがわかる。さらに、中枢部の西側から南側にかけて、増水時に滯水したと思われる黒い痕跡（ゾイルマーク）が明瞭に認められる。その範囲は、南北大路の西側まで及んでおり、唐代の滯水範囲は、さらに広かった可能性がある。中枢部の東側にも空堀状の痕跡が認められるため、もともとは中枢部の護城河として掘削されたものの、城内の北西側が低い地形を反映して、西側を中心滯水していたものと思われる。図 10 上にあるように、ア・ベシム遺跡周辺の基幹水路としては、シャフリスタン西側とラバト東側の水流の存在が知られる。一方、ラバト中枢部西南の池に滯水する水は、南の天山山脈からの雪解け水などを外城南門から城内に引き込んでいたものと推定できる。城内に引き込まれた水は、南北大路の西側を中心に護城河に滯水し、城内の貴重な水資源として利用された可能性が高い。この水は、1967 年の航空写真でも明らかのように、池部分から北側に流れ、教会の西側を通って、ラバト北壁・シャフリスタン北壁の「接合」部分から、城外に流出している。図 10 上の青色で示した滯水範囲は、衛星画像から想定される最大範囲を示したものだが、図 15 の測量成果に基づく城内の地形とも極めて整合的である。中枢部の護城河が城内の「利水」に重要な役割を果たし、その痕跡が現在まで滯水する池として残存している可能性を想定しておきたい。

#### (5) 区画

城内には、道路や護城河の痕跡の他、人工的な高まりがいくつか観察できる。規模からすると、それらの多くは、ラバト内キリスト教会のような単独の建造物を示す可能性が高い。しかし、中枢部西南側から西側にかけて、かなり規模の大きな高まりを示す区画が確認できる。1つ目の遺構は、1939・40 年にベルンシュタムが発掘した仏教寺院のトレンチが明瞭に見えており、東西 64m × 南北 113m の長方形区画という報告規模と合致することから、規模の大きい仏教寺院の伽藍（ラバト内寺院）と判断できる。その北西には、ラバト内寺院と軸線を描える方形のもう 1 つの区画が確認できる。中央部分には、発掘もしくは盗掘と思われる痕跡も認められる。もちろん、遺構が消失した現状で、発掘によって構造や機能を確認することも難しいと思われるが、その規模や範囲が第 2 仏教寺院とほぼ同じである点や、ベルンシュタムが発掘したラバト内寺院と軸線を描えることから考えて、仏教寺院の可能性が高いと考える。後述する安西都護府が置かれた交河故城では、唐代の区画が全城判明しているが、官衙区画はいずれも小規模で、大規模な単独区画はいずれも寺院跡である。ラバト内寺院の北側区画の規模から考えれば、仏教寺院以外の用途を想定しにくい。

以上、仏教寺院の可能性がある 2 区画は、ラバト西南城壁と軸線を同じくし、その中軸を通過する城内道路も想定されるなど、唐碎葉城の中で極めて企画・計画的に配置された区画といえる。南門から中枢部正門に至る南北大路という中心軸に対して、南門から西南城壁と平行して展開するラバト内寺院の軸線の存在は、唐碎葉城において重要な位置を占めていたと思われる。このような重要な軸線に中原特有の伽藍配置を持って存在するラバト内仏教寺院は、やはり唐大雲寺にふさわしい要素を持っていると考える。

#### 2-2 唐代西域都市の空間構造と碎葉城

前節では 1967 年に撮影された CORONA・航空写真をもとに、唐碎葉城の平面配置を復原した。この基礎的な復原成果を踏まえて、唐代西域都市との比較に議論を進める。

唐は太宗の時期に東突厥を滅ぼすと、西突厥を中心とする西域への侵攻を開始した。640 年に高昌を滅ぼ

すと、交河故城に安西都護府を設置する。648年には、クチャを攻略して安西都護府（張平 2003）を移置し、安西四鎮（龟兹・疏勒・于阗・碎叶）を設置した。その後、高宗の時期に吐蕃の侵攻を受けて領土を失うが、武則天の時期には再び回復する。702年には庭州（640年設置）に北庭都護府を設置し、711年には北庭大都護府と改称する。北庭都護府と安西都護府は、天山南北を分けて管轄するようになり、特に、北庭故城は唐代西域の中心都市として発展を遂げた。北庭故城は790年に吐蕃によって陥落するが、9世紀中葉以降に高昌回鶻が建国されると、回鶻王の避暑地となり、実質的な陪都となつた。元代には、「別失八里」と改称され、行政機構が置かれるものの、その後の文献には登場しなくなる。このような唐代西域の歴史的状況を踏まえると、唐碎葉城と比較が可能な西域都市として、交河故城・北庭故城・高昌故城の3遺跡がピックアップできる。この中で、高昌故城（侯煥 1989、孟凡人 2006、アル伯特・格伦威德尔 2015など）を除いた2都市、すなわち安西都護府が置かれた交河故城・北庭都護府が置かれた北庭故城は、唐が直接造営した都市遺跡である。本論では、この2都市に着目して、碎葉城と比較してみる。

### （1）交河故城との比較

新疆ウイグル自治区トルファン市に位置する交河故城は、シルクロードの世界遺産にも登録されている。乾燥した気候のおかげで、遺構の保存状態がよく、建物が地表に残存している。元々は車師前国の都市として造営されたが、640年には安西都護府が設置された。その後、高昌回鶻の支配下となり、14世紀まで遺跡は存続したとされる（孟凡人 2001など）が、現存する都市としての基本構造は唐代に成立したと考えられている。図16左にあるように、遺跡は高度30m、南北1650m、東西最大幅300mの柳葉形の台地上に位置している（解耀华主编 1999・李肖 2001）。30mの切り立った崖の上という特異な立地条件のため、碎葉城とは大きく構造が異なるように見えるが、城内の構造原理には高い共通性が認められる。交河故城は幅10m、長さ350mの南北道路によって東西に大きく二分されている。南北道路の東西の空閑地も広く、場所によっては50m幅を超える場合もある。この南北道路によって、居住区は大きく東西に二分され、さらに東西道路によって細分されている。また、南北道路の北端から北側には、大規模な敷地を持つ寺院が密集している。李肖は、交河故城を機能の異なるA～Fの6区画に分類している（李肖 2001）。

**[A区]** 大院落区：独立した院落で構成される階層の高い人々の居住区。高級官僚の邸宅とされる。

**[B区]** 衙署区：A区に隣接し、東西道路・南北道路で囲まれた独立した空間に立地する官衙区域。

**[C区]** 倉儲区：駐軍専用の倉庫群。

**[D区]** 街巷区：一般住民の居住区。規模の小さな建物が密集して存在する。

**[E区]** 寺院区：上記4区画以外、都市の3分の2を占める広大な区画が寺院区とされる。

**[F区]** 墓葬区：台地の北端に位置する墓葬区。

以上、交河故城は唐代を中心発展した都市空間の建物配置が判明している稀有な遺跡であるが、幅広の中央道路（空閑地を含むため、実際の道路幅よりもはるかに広い）によって、城内を機能の異なる区画に分割するという特徴が認められる。碎葉城も、南側の南北大道、北側の東西大道によって城内を機能がそれぞれ異なる空間に区分しており、共通した構造的特徴を有することがわかる。区画や建物配置が現存する交河故城の事例は、碎葉城内の空間構造を考える際に重要である。

今、交河故城の区画を参考に、唐碎葉城の区画を考えたのが図16右上である。碎葉城は、中枢部を除くと道路によってA～Gに区分できる。中枢部は、碎葉鎮の政治・行政の中核が置かれた場所である。A区は、大型の伽藍を持つ仏教寺院を中心とする区画と考えられる。B区は、中枢部と密接にかかわる区画で、官衙区域・高級官僚の居住区の可能性が高い。C区は、区画が狭く城壁に隣接することから防御区域と想定する。D区は、東西道路によってシャフリスタンにも繋がる区画で、一般住民の居住区・商業区と考える。E・F区は、防御施設が置かれた区画と思われ、特に屈曲門を持つF区は軍の駐屯区画だと想定する。G区は、護城河を利用した水利区画と考える。文献史料が存在しない都市遺跡における城内の機能的構造を復原するのは難しいが、唐代の建物配置が判明している交河故城との比較によって、ある程度の推定は可能である。

### （2）北庭故城との比較

続いて、北庭都護府が設置された北庭故城と比較してみたい。北庭故城は、新疆ウイグル自治区のジムサー

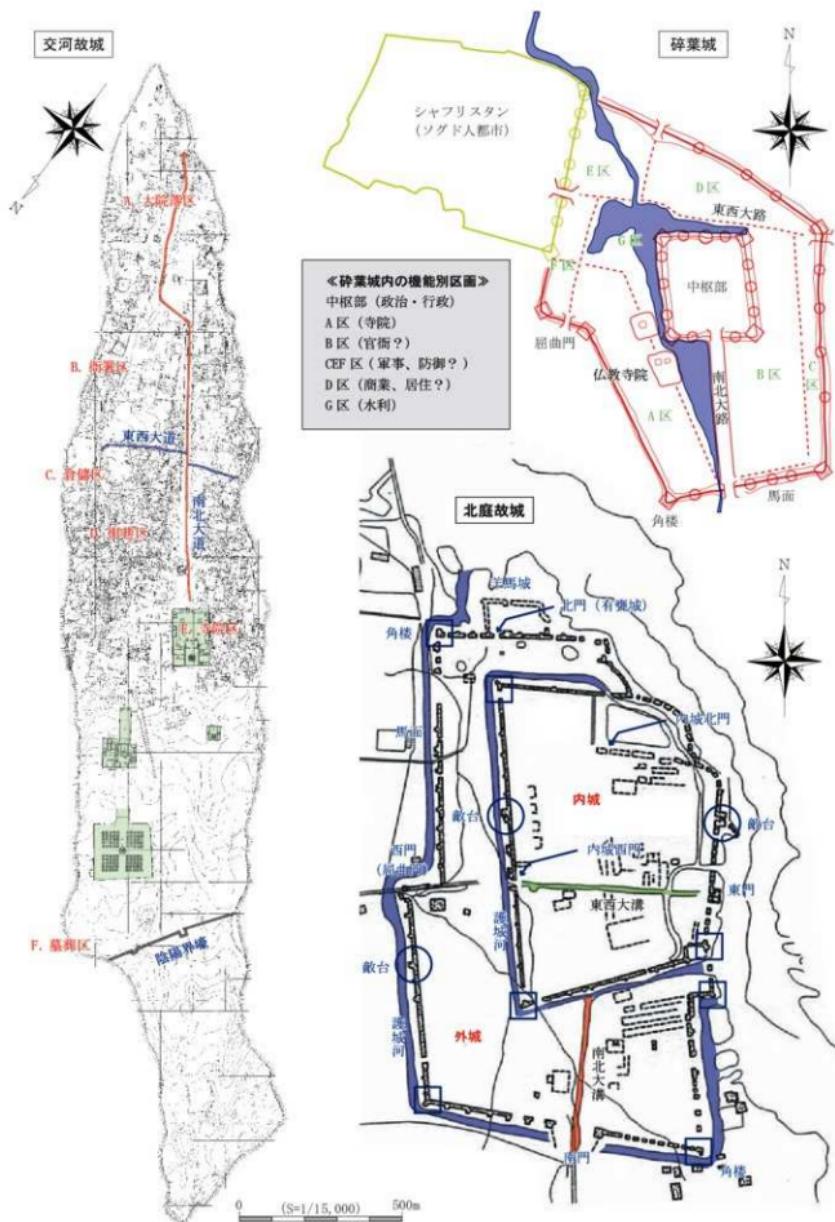


図16 唐代西域都市（交河故城・碎葉城・北庭故城）の平面配置

ル県に所在する。1980年に行われた基礎調査の概報(中国社会科学院考古研究所新疆队 1982)があり、その後、航空写真による図面作成の成果(刘建国 1995)が公表されている。2016年からは、中国社会科学院考古研究所による新たな体制での集中的な発掘・ボーリング調査も行われている(中国社会科学院考古学研究所のHP参照)。城壁・城門の年代や構造など、新たな成果が新聞報道されているが、発掘報告は本論執筆段階(2020年3月)未刊のため、本論では1982・1995の成果を基に碎葉城と比較する。

図16右下には、1928年に袁复礼が作成した測量図に基づく図面を提示した。北庭故城は、不規則な多角形で構成される内・外城の二重構造を特徴とする。1982年の報告では、外城が「唐初年」、内城が「高昌回鶻期」の造営とされているが、近年の調査では内城も主体は唐代で、都城の基本的な構造は北庭都護府の段階に完成したものと認識されている。なお、航空写真的分析から、内城内の北東寄りには構で囲まれた長方形の区画も想定されており、刘建国は「宮城」と呼称する(刘建国 1995)。詳細は今後の調査の進展に期待したいが、ここでは1982年概報の記載を中心に外城・内城に注目する。外城・内城は、不規則な多角形で構成され、城壁の外側には幅広の護城河が掘削されている。東側では、内城と外城は護城河を介して繋がっており、水運による城内外のネットワークが指摘されている(刘建国 1995)。屈曲部にはすべて角櫓があり、城壁には密な間隔で馬面が設置されている。外城西壁の南寄り、内城東西壁の北寄り、合計3か所には馬面(叶万松・李德芳 2004)より大きな「敵台」も確認できる。外城壁には北門、西門、南門の三箇所の門遺構が確認されている。北門(1門道)は外側に鉤形に屈曲する甕城(城門と一体化する防衛機構:徐承炎・曹中月 2015、李双・徐磊・高兴超・古日扎 2017など)があり、そのさらに外側にはやはり鉤形に屈曲する「羊馬城」(主城壁外側にある防護用の小型城壁:李井成 2002・孙华 2011など)がある。甕城と羊馬城は、開



北庭故城出土遺物 1 (条塘)・2 (蓮華紋方壠) = 1/6 3・4 (蓮華紋瓦当) = 1/4

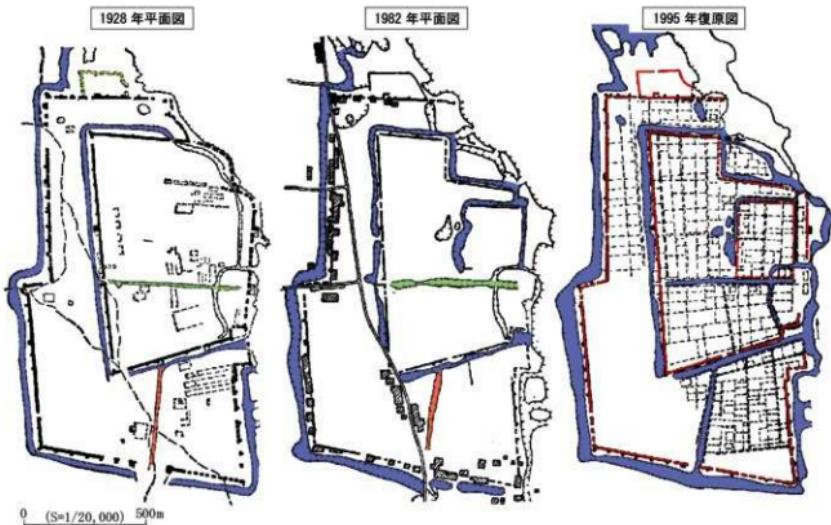


図17 北庭故城の出土遺物(上)と平面図の変遷(下)

口部を反対向きにすることで、防御性が高められている。西門は西城壁の屈曲部に位置しており、その構造は唐碎葉城西南門（屈曲門）と同じである。なお、城壁の屈曲部に瓮城や城門を設ける構造は、高句麗の平地城（国内城）や山城（五女山城・丸都山城）などにも類例がある（鄭元吉吉 2009）。南門は南壁中央やや東よりに位置し、南門から北に向けて南北道路と思われる幅広の溝が確認されている。この道路は内城の南護城河に接続するが、内城内まで貫通していない。一方、内城壁には北門と西門が確認されている。北門は屈曲部の東側、西門は西壁のやや南寄りに位置しており、ともに排叉柱を用いた過梁式1門道形式の門遺構である。西門からは内城を横断する道路と思われる構が確認されている。この東西道路は、外城西門の屈曲門と繋がり、城内で唯一、内外城を貫通しており、「宮城」の南側に接続している。

以上の北庭故城の二重（三重）構造は、唐碎葉城と多くの共通点が認められる。その重圓構造については、図17下の実測図の変遷が示すように、現段階では確定したとは言えないものの、「宮城」を含む三重構造は、北庭故城の完成段階である北庭都護府の時期の平面構造と考えられる。出土した蓮華紋瓦当も、図17上のように、碎葉城出土瓦当よりもかなり崩れた様相を呈し、現状で認識されている北庭故城の平面形は、唐碎葉城の時期よりも新しい北庭都護府の段階である点を示唆する。既報告遺物の状況からすれば、唐碎葉城の方が古く、北庭故城の平面形に影響を与えた可能性も考えられるが、北庭故城の平面形は唐初の顯慶3年（658）～龍朔2年（662）の北庭城段階に成立したという説（徐承炎・曹中月 2015p55など）もあり、年代に関しては今後の調査成果の報告を待つ必要がある。しかし、系譜関係の問題は別としても、両者の空間構造には極めて高い共通性が認められる点が重要である。例えば、①不規則な多角形を呈する重圓構造、②馬面・角楼・屈曲門・甕城などの防御施設、③護城河を利用した水運・水利、などである。言い換えれば、都城の設計における原理面で両都城には高い共通性が認められる。この点は、節を改めて踏み込んでみたい。

### 2-3 北庭故城と碎葉城の設計原理

前節では、北庭故城と碎葉城の平面配置に設計原理の共通性が認められる点を指摘した。今、両者の設計原理を比較するため、図18に両都城の平面をシンプルに模式化して比較する図を提示した。

両者に共通するのは、「直線的な城壁を用いた多角形によって、防御性の高い重圓構造を持つ空間を構成する」という設計思想である。西域に割拠する遊牧民族系国家に対して、都市という点的拠点により領域支配を広げた唐王朝にとって、西域都市の要素として「防御性の高さ」が最も重要な点がわかる。まず、外城壁を見ると、北庭故城は内城との接点を除外すると大きく6つの直線的な城壁で構成される。北側から

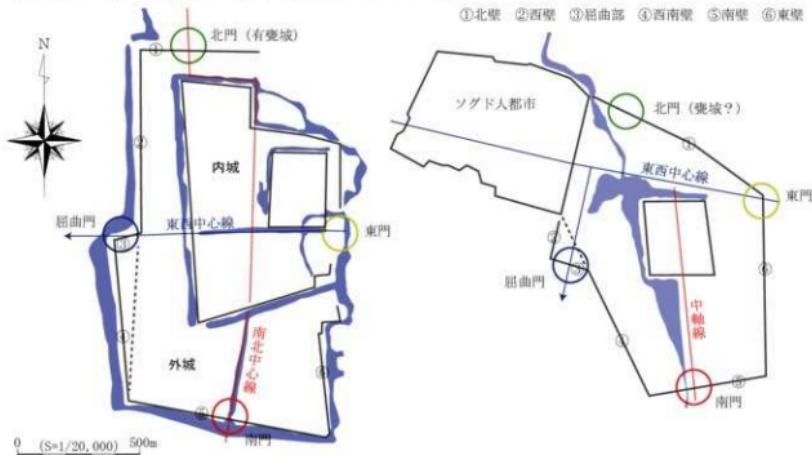


図18 北庭故城（左）と碎葉城（右）の設計原理

反時計周りに①～⑥城壁と呼ぶと、西側の③城壁に置かれた屈曲門が東西方向の中心軸線上に位置すると同時に、防御上の重要な役割を占めていた点が想定できる。②の城壁を直線で南に引くと、④⑤の交差点、すなわち西南隅にぶつかる点から考えても、③部分を意図的に屈曲させて防御施設を構築した点がわかる。城壁を屈曲させることで、兵の出撃・退却に際しての外側からの死角を作ると同時に、城門に攻め寄せる敵への城壁上からの攻撃地点を増やす目的があったと思われる。一方、碎葉城もシャフリスタン東壁を除くと①～⑥の城壁で構成される。西側の③城壁に設置された屈曲門が、碎葉城の防御の要となっている点は既に指摘した通りである。北庭故城と同じく西南城壁④をそのまま北側に延伸していれば、シャフリスタン東南隅の角楼にぶつかっていることから、この部分を意図的に屈曲させることで防御施設を作ったことがわかる。一方、北庭故城の北門には彌城、その外側には羊馬城が設置されている。碎葉城北門もシャフリスタン北東隅との接合地点となり、城外への排水地点であることからも何らかの防御施設が設置されていた可能性が高い。すなわち、両城ともに北門と西南（屈曲）門が、外城全体の防御の拠点となっており、城内における両門間の移動が最短となるように設計されていると思われる。北門と西南門は、対になる防御機構だった可能性が高い。王方翼の修築記事にある「立四面十二門、皆屈曲作隠伏出沒之状」という記載は、特定の門構造を指すのではなく、このような「城門を中心とした防御体系の總体」を示すものだと考える。

外城にみられる防御を重視した設計思想に対して、城内には政治・行政の中心軸および経済の中心軸となる2つの道路が整備されている点も両城に共通する。前述したように唐碎葉城では、南側の政治・行政機構を支える南北軸（南北大路）、北側の経済活動を支える東西軸（東西大路）が存在する。一方、北庭故城では外城・内城（そして「宮城」）を東西に結び付ける東西軸（東西溝）、および商業区域と思われる外城南部にあら南北軸（南北溝）、やはり2つの軸線が存在している。東西軸が政治・行政的な中心、南北軸が経済的な中心となっており、方向は逆だが碎葉城と同じ原理である。なお、北庭故城の「宮城」部分の年代や機能は不明であるが、碎葉城中枢部とほぼ同じ規模で平行四辺形の平面形を持つ点も、偶然ではない可能性がある。また、2つの軸線を持つ道路によって、城内が異なる機能を持つ区画に細分されている点、城内で護城河を利用した水運が発達している点も両城に共通する特徴である。

以上、北庭故城と碎葉城は、表面的な平面配置からすると大きく異なっているように見えるが、その設計思想、あるいは設計原理に着目すると非常に高い共通性が認められる。両者の造営に際しては、かなり直接的な情報の共有があった可能性が高い。庭州城（640～）段階の平面構造は不明だが、北庭都護府（702～）段階に現在の平面形が完成したと考えるのであれば、碎葉城（679～）における王方翼の設計思想が、北庭故城に影響を与えたと想定することも可能である。しかしながら、両城の設計にみられる思想や「都市づくりの原理」は、両城のみの系譜関係というよりも、唐王朝の西域經營というより広い歴史的な枠組みの中で維持されている可能性が高いと考える。すなわち、防衛性の高い城壁に囲まれた都市空間に、①唐王朝の西域經營を支える政治・行政的機能、②シルクロードを通じた東西交易を支える経済的機能、③仏寺・教会など都市住民の民心を支える宗教的機能、これらの機能的空間を構造的に配置する設計思想が、西域都市で緩やかに共有されていたと考える。西域經營という唐の政治戦略の中で展開した西域都市は、唐王朝による共通の思想や概念に基づいて設計された点に、その歴史的意義が見いだせるのである。

## 2-4 唐代都城の階層性とその展開

CORONA・航空写真を用いて、唐碎葉城の平面構造を復原した上で、交河故城・北庭故城との比較を行い、唐代西域都市の設計思想に高い共通性が認められる点を指摘した。特に、北庭故城と碎葉城には、直接的な設計原理の共有があった可能性を考えた。唐代都城としての西域都市には、大きく分けて3つの機能が付与されていたと考える。すなわち、①西域支配における軍事拠点としての役割、②西域經營における政治・行政拠点としての役割、③シルクロードを通じた東西交易の拠点としての役割である。このような機能を持つて設計された西域都市は、首都である長安城・洛陽城、あるいは同時期の東アジアに展開した唐代都城とは異なる特徴を持っている。今、唐代西域都市の特徴を整理すると、以下の5点にまとめることができる。

### (a) 防御に特化した外城構造

30m の切り立つ崖という自然の要害を利用した交河故城を除けば、西域都市の大きな特徴は防御に特化した外城構造にある。城壁屈曲部の角楼、城壁に密に設置された馬面・敵台、城門外の甕城、城壁外の護城河などの基本的な防御施設が整備される。特に注目できるのは、碎葉城・北庭故城にみられた城壁の一部分を意図的に屈曲させ、城門を設置する防御施設（屈曲門）である。外城壁が直線的な多角形で構成されるのは、防御に特化した西域都市の特徴である。外城壁の構造は、「軍事拠点としての都市」の性格を示している。

#### (b) 重團的な内外二重（三重）構造

唐代都城は、宮城・皇城・外郭城の重團構造に特徴がある。しかし、長安城・洛陽城などは、皇帝を中心とした南面構造（坐北朝南）を基本とするため、宮城・皇城が「中央北詰」に位置する。一方、西域都市は、中心に向けて重團構造化されている点に特徴がある。政治・行政的の中枢が、中心に近い閉鎖空間に位置する点は、皇帝権力と皇帝祭祀によって構造化される中原都城とは大きく異なる特徴である。

#### (c) 城内に存在する2つの軸線

皇帝を中心とする中央北詰型の中原都城は、南郊円丘祭祀などの皇帝祭祀によって発達した南北中軸線を最大の特徴とする。一方、西域都市は2つの軸線（南北大路と東西大路）を持つことが特徴である。1つは、政治・行政的な中心軸で、外城正門と内城中中枢部を結ぶ。もう1つは、経済的な軸線で居住区・商業区に位置する。両者は必ずしも交差する必要はなく、要素の異なる2つの中心軸によって城内は機能別の空間に区画分けされる。両軸線は、「支配・統治拠点としての都市」「交易・商業拠点としての都市」という西域都市の2面性を象徴的に示す要素といえる。

#### (d) 護城河と連動した水運・水利システム

すべての都城・都市空間において、水系システムが重要な意味を持つ点は言うまでもない。乾燥地帯に位置する孤立した防御空間としての性格を持つ西域都市においては、その重要度はさらに高い。特に、北庭故城・碎葉城の事例からすると、都市全体の水系システムが内・外城の護城河と連動している点が重要である。城内における水運・水利などの水系システムは、防御機構である護城河と一緒に設計されていた可能性が高い。防御機能と水系システムが結びつく機能的な構造は、西域都市の大きな特徴といえる。

#### (e) 仏教寺院・キリスト教会を中心とする大型宗教施設

唐代の西域では、仏教・景教（キリスト教ネストリウス派）、摩尼教、抨火教など様々な宗教が信仰されていた。西域都市では、これらの宗教施設が城内外に混在する点が特徴である。7～8世紀には、大規模な仏教寺院と景教教会が、数多く造営された。特に、仏教寺院は官衙区画よりもはるかに大きな敷地を持つ伽藍が多く、城内の重要な場所に占地していた点が多くの都市で共通する。西域都市において、在地住民の民心を支える宗教施設が、非常に重要な役割を果たしていた点が読み取れる。

上記の特徴を持つ唐代西域都市を、本論では「内陸型交易商業都市」と呼称する。では、西域都市は、長安城・洛陽城を頂点とする唐代都城の階層性（宿白 1978・1990 など）とその展開過程の中で、どの様な歴史的位置にあるのだろうか。次には、唐代都城の東への展開過程と比較して考えてみたい（図19）。

首都機能を持つ唐長安城・洛陽城は、宮城・皇城・外郭城の重團的な三重構造を特徴とする。皇帝が居住すると同時に国家的な儀礼が行われる宮城、政治・行政機関が集中する皇城は、都城の中央北詰に位置し、皇帝は都城に対して南面（坐北朝南）する。「皇帝権力の中枢」である宮城が、「皇帝祭祀の中枢」である礼制建築一皇城の左右に配置される宗廟と社稷（左祖右社）、冬至に昊天上帝を祀る円丘（南郊）、夏至に皇地祇を祀る方丘（北郊）などと一緒に結びつくことで生まれた「中軸線」が唐代都城の特徴である。宮城・皇城・外郭城という重團構造は、城壁によって相互に「隔絶」されると同時に、皇帝権力の象徴である中軸線に位置する宮城正門・皇城正門によって相互に「接続」され、皇帝を中心とする支配構造を地上に可視化する役割を果たした。すなわち、中原都城は、皇帝を宇宙の中心とする世界観や支配体制を、地上に具現化するための「舞台」であり、皇帝権力を可視化する「装置」としての「思想空間」なのである。このような思想空間としての唐代都城の諸特徴は、渤海上海城や日本平城京など各国の「王都」として採用され、東アジアに展開した。図19右上にあるように、渤海や日本では、唐長安城の約4分の1規模の都城が造営されており、各国は唐帝国を中心とする国際的な階層秩序に組み込まれていたと思われる。しかし、東アジアの国々は、



図 19 唐代都城の階層性と「内陸型・海港型」交易商業都市